

# 東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

—平成12年度—

平成13年3月

東大阪市教育委員会

## はしがき

東大阪市には、地下深くに先人の残した貴重な文化財遺産－遺跡が数多く眠っています。本市では、これらの遺跡・埋蔵文化財の保護・顕彰の観点から、大阪府下では早い時期に、文化財課や郷土博物館を設置するなど、広く市民の方に文化財の活用と普及に努めてまいりました。

また、平成11年度より、個人・小規模事業主を対象に、遺跡内での個人住宅建設工事だけでなく一定規模以下の賃貸共同住宅等建築工事に伴う発掘調査経費の一部を公費負担する制度を、国(文化庁)・大阪府教育委員会のご協力を得て実地しております。今回報告します遺跡の調査概要には、上記の公費負担による調査も含まれております。調査成果は次章以下に記すとおりで、次世代に引き継ぐべき遺構・遺物が数多く発見されました。本書が埋蔵文化財保護行政の実績報告としてだけでなく、地域の歴史を掘り起こす冊子として広く読まれることを望みます。

平成13年3月

東大阪市教育委員会  
教育長 奥田健次

# 目 次

## はしがき

## 目次・例言

第1章 平成12年度国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要	1
第2章 山畠古墳群第18次発掘調査	3
第3章 小若江遺跡第5次発掘調査	13
第4章 神並遺跡第25・27次発掘調査	21
第5章 若江遺跡第77次発掘調査	47
第6章 山畠古墳群第19次発掘調査	61
第7章 段上遺跡第11次発掘調査	77

# 例 言

- 本書は、国庫補助50%・市負担50%(総額10,000,000円)で実地した、個人住宅及び個人・小規模事業主による賃貸共同住宅の建設工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
- 調査は、調査原因にかかる個人・小規模事業主の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実地した。
- 現地の土色及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(1998年版)に準拠し、記号表示も同書に従った。
- 調査の実施・進行にあたり、下記の方々からご協力いただいた。記して謝意を申し上げる次第である(敬称略・順不同)。  
今里 安宏・奥林 昭二・木積 一仁・柳井 敬太郎・  
柳井 正雄・藤川 清・藤川 スエ子・松本 恭徳

## 第1章 平成12年度国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成12年度の文化財保護法第57条の2・3に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出（通知）件数は平成13年2月28日現在で届出は474件、通知は60件、合計534件である。届出（通知）工事の内訳は下記のとおりである。

個人住宅	127件	分譲住宅	146件	共同住宅	29件	工場	1件	店舗	6件
その他建物	15件	道路	3件	学校	1件	宅地造成	16件	公園造成	2件
ガス	73件	電気	4件	水道	22件	下水道	89件		

534件の届出（通知）の指導事項は発掘調査53件 工事立会238件 慎重工事243件であった。

本市教育委員会では、国庫補助事業としては発掘調査指示の内下記表のものについて実施した。個人住宅の遺跡の確認調査を18件、同発掘調査が1件、個人が実施する賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が4件、同発掘調査が5件、埋蔵文化財包蔵地外の試掘調査を1件である。

1は、建物建設予定地では埋蔵文化財は検出されなかった。浄化槽設置予定地で土師器を検出したが、公共下水道に放流することとなった。建設予定地内の掘削工事に伴って立会調査を実施したが支障なかった。

3は、調査地東側で4個のピットを確認したが遺物が出土せず、時期は確定できなかった。基礎掘削時に再度立会調査を実施したが、遺物・遺構とも検出できなかった。

5は、掘削最下層の第6層から出土した瓦が近代のものであり、立会調査も実施したが新しい時期のものであり、工事に支障なかった。

6は、現地盤から1mまで地盤改良するということで1mまで確認した。0.75~1mまで盛土であり、一部分残った灰オーリーブ色砂混じりシルト、青灰色砂混じり粘質土から須恵器・土師器・磁器が出土した。工事に支障なかった。

8は、杭基礎ということで2.4mまで確認した。0.5m盛土がありこの中から土師器、瓦器が出土した。以下灰オーリーブ色砂混じりシルト質粘土、灰オーリーブ色細・中粒砂、にぶい黄色砂混じりシルト質粘土、灰色シルト質粘土、浅黄色粗・中粒砂、青灰色粘土、青灰色砂混じりシルト質粘土、黒色粘土、オーリーブ灰色シルト質粘土となる。第5層の灰色シルト質粘土から黒色土器が1点出土した。

9は、地表下0.35~0.55mの第4層灰オーリーブ色砂混じり砂質シルトから磁器・土師器細片が各1、1.2~1.5mの第8層褐色シルト質粘土から弥生土器、石錐が出土した。掘削深度では工事に支障はなかった。

13は、第1層灰色砂混じり砂質土から土師器・瓦器・磁器細片が出土、上面でピットを検出した。立会調査を実施し、建設予定地中央部付近に包含層が残っているのを確認したが工事に支障はなかった。

15は、杭基礎ということで1.6mまで確認した。地表下0.85~1mの第4層灰オーリーブ色砂混じりシルトから瓦片、1~1.15mの第5層灰色シルト質粘土から瓦器小片を検出したが工事に支障なかった。

18は、杭基礎ということで1.8mまで確認した。地表下1.1~1.2mの第7層緑灰色砂礫から土師器、1.2~1.4mの第8層緑灰色シルトから埴輪、1.4~1.8mの第9層暗緑灰色極細粒砂から埴輪を検出した。古墳の周濠になると思われるが建築工事に支障がでるため、発掘調査はならなかった。

23は、地表下1.6mまで確認した。1.3mの灰色細粒砂混じりシルトから弥生土器を検出した。1mまでの掘削には支障ないが、それ以下を掘削する場合は発掘調査が必要となる。

24については、杭基礎ということで2.1mまで確認した。地表下0.55~1.15mの第5層灰オーリーブ色細粒砂から須恵器、1.15~1.65mの第6層暗青灰色粘土から縄文土器が出土したが、二次堆積と考えられ工事に支障なかった。

## 平成12年度緊急発掘調査補助事業実施状況

調査事業名及び用途		実施場所	担当	調査期間	調査面積	備考
山畠古墳群第18次調査 (貸貸共同住宅)		客坊町982	下村	平成12年1月11日 ～1月15日	34m <sup>2</sup>	平成11年度調査 本番第2章
小若江遺跡第5次調査 (貸貸共同住宅)		小若江3丁目313-20	下村	平成12年1月31日 ～2月1日	12m <sup>2</sup>	平成11年度調査 本番第3章
馬場川遺跡確認調査 (個人専用住宅)		横小路町3丁目458	若松	平成12年3月21日	4 m <sup>2</sup>	平成11年度調査 遺物、遺構ともなし
1 山畠古墳群確認調査 (貸貸共同住宅)		瓢箪山町310-1～2	勝田	平成12年4月26日	3 m <sup>2</sup>	第3.4層から土器器が出土。 立会調査を実施。
2 神並遺跡第25次調査 (貸貸共同住宅)		西石切町1丁目781	若松	平成12年4月28日 ～5月26日	161m <sup>2</sup>	平成11年度に確認調査実施 本番第4章
3 国知の須賀文化財包蔵地 外の試掘調査		六万寺町1丁目246	若松	平成12年6月13日	21.3m <sup>2</sup>	ピットを留置。遺物は出土せず。 立会調査を実施。支障なし。
4 殿上遺跡第11次調査 (個人専用住宅)		下六万寺町3丁目1328-8	若松	平成12年6月29日	6.3m <sup>2</sup>	第3.4層から赤土系、土器系、打削面、土 器器、瓦等が出土。骨管等12件。
5 若江北遺跡確認調査 (個人専用住宅)		若江北町3丁目783-1	若松	平成12年7月5日	2.8m <sup>2</sup>	第1～6層から土器器、瓦が出土。 立会調査を実施。支障なし。
6 芝ヶ丘遺跡確認調査 (個人専用住宅)		中石切町4丁目2145-1	若松	平成12年7月6日	2.8m <sup>2</sup>	第1～2層から土器器、瓦・磁 器が出土。
7 若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)		若江本町2丁目57-1	若松	平成12年7月10日	3.77m <sup>2</sup>	土器器出土。漆塗器。発掘調査。 本番第5章
8 宮ノ下遺跡確認調査 (個人専用住宅)		長堂1丁目70-4, 71-2, 72-4	若松	平成12年7月11日	7.02m <sup>2</sup>	第5層から黒色土器が出土。
9 鬼虎川遺跡確認調査 (個人専用住宅)		赤生町1487-4	若松	平成12年7月13日	3m <sup>2</sup>	中世以降の構と遺物を検出。 工事に支障なし。
10 若江遺跡第77次調査 (個人専用住宅)		若江本町2丁目57-1	若松	平成12年7月17日 ～7月23日	42m <sup>2</sup>	本番第5章
11 出雲井遺跡群確認調査 (個人専用住宅)		出雲井町455-3	若松	平成12年8月7日	3 m <sup>2</sup>	造構、遺物ともなし
12 殿上遺跡確認調査 (個人専用住宅)		下六万寺町3丁目1148-1, - 2, 1149	若松	平成12年10月12日	3 m <sup>2</sup>	段階的に構造、窓、壁等を検出。 遺物は地元でさきり工事に對応。
13 若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)		若江本町4丁目942-5	若松	平成12年10月19日	4 m <sup>2</sup>	第1層から土器器、瓦、磁器、上面 よりピットを認定。再度立会調査実施
14 弦刀遺跡確認調査 (個人専用住宅)		近江堂1丁目242-6, 246- 47	若松	平成12年10月30日	3 m <sup>2</sup>	第4～5層で瓦、瓦器を検出。
15 山畠古墳群確認調査 (貸貸共同住宅)		客坊町968-2	若松	平成12年11月1日	7 m <sup>2</sup>	8.1～11.8mの赤土系、土器器、瓦等 が出土。土器器出土。骨管等12件。
16 吉田遺跡確認調査 (事務所付個人住宅)		吉田下島23-5	勝田	平成12年11月6日	4 m <sup>2</sup>	遺構、遺物ともなし
17 山畠古墳群第19次調査 (貸貸共同住宅)		客坊町968-2	若松	平成12年11月13日 ～12月8日	159.71m <sup>2</sup>	本番第6章
18 西ノ江遺跡確認調査 (個人専用住宅)		東山町1071-1	勝田	平成12年11月24日	2m <sup>2</sup>	第7～9層で土器器、埴輪が出土。
19 神並遺跡第27次調査 (貸貸共同住宅)		西石切町1丁目773-1	若松	平成12年12月15日 ～12月29日	110m <sup>2</sup>	本番第4章
20 山畠古墳群確認調査 (貸貸共同住宅)		瓢箪山町89-1	勝田	平成12年12月21日	2m <sup>2</sup>	土器器出土。発掘調査が必要
21 水足尾遺跡第2次調査 (貸貸共同住宅)		五条町1320	若松	平成13年1月15日 ～2月8日	183m <sup>2</sup>	来年度に報告予定
22 鳥坂遺跡確認調査 (個人専用住宅)		箱殿町522-6	勝田	平成13年1月15日	2m <sup>2</sup>	造構、遺物ともなし
23 西ノ江遺跡確認調査 (貸貸共同住宅)		弥生町1414-6	勝田	平成13年1月16日	2m <sup>2</sup>	第2層から弥生土器出土。 発掘調査が必要。
24 寬原遺跡確認調査 (個人専用住宅)		箱殿町582-2～5	勝田	平成13年1月18日	2m <sup>2</sup>	第5層から須恵器、第6層から 绳文土器が出土。二次堆積
25 山畠古墳群確認調査 (個人専用住宅)		上四条町394	勝田	平成13年2月2日	5m <sup>2</sup>	造構、遺物ともなし
26 山畠古墳群第20次調査 (貸貸共同住宅)		瓢箪山町89-1	若松	平成13年2月13日 ～3月31日	200m <sup>2</sup>	来年度に報告予定
27 小若江遺跡確認調査 (個人専用住宅)		小若江3丁目678-46	勝田	平成13年2月16日	2m <sup>2</sup>	遺構、遺物ともなし
28 水足尾遺跡確認調査 (個人専用住宅)		水走2丁目16-6	勝田	平成13年2月26日	2m <sup>2</sup>	遺構、遺物ともなし
29 山賀遺跡確認調査 (個人専用住宅)		若江南町5丁目347-10	勝田	平成13年3月16日	2m <sup>2</sup>	遺構、遺物ともなし

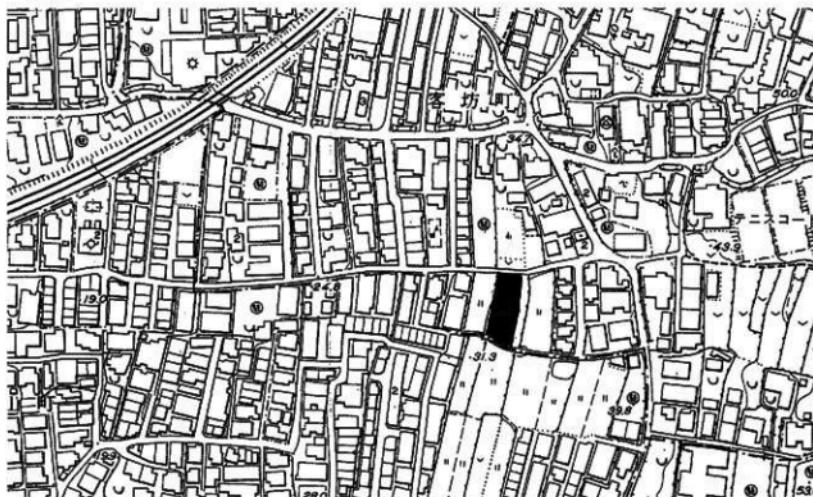
## 第2章 山畠古墳群第18次発掘調査

### 1) 調査に至る経過

平成11年10月25日付けを以って、東大阪市客坊町982地番において個人事業主による共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」があった。工事予定地は、周知の山畠古墳群の範囲内にあたるため確認調査を実施したところ、中世期の遺構・遺物が検出された。このため、事業主と文化財の取扱いについて協議を行った。その結果、建物本体については設計変更などにより、文化財に影響を及ぼさない工法で実施することになったが、浄化槽部分については基礎掘削により文化財を破壊する恐れがあると考えられ、工事予定地約34m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を実施することになった。発掘調査は、平成12年1月11日から平成12年1月15日まで、東大阪市直営事業として実施した。

山畠古墳群は、東大阪市客坊町から上四条町にかけての山麓部に形成された古墳時代後期の群集墳である。これまでに70基前後の古墳の存在が確認されているが、現在では市立郷土博物館がある標高50m付近の山麓部に約30基ほどが残されている状況にある。今回の調査地点も既に水田として開発された地域であり、現状では古墳の存在は確認できないが横穴式石室の基底石が発見される可能性もあるところから、確認調査を実施することになった。

確認調査は、平成11年11月4日に実施した。工事予定地内に南北1m、東西9mのトレンチを3ヶ所設定した。基本層序は、各トレンチとも共通しており、第1層耕作土（厚さ約50cm）、第2層灰褐色礫混じりシルト（厚さ約40cm）西にいくにしたがって大きく傾斜する。中世の土器を含む。第3層暗褐色礫・シルト混じりシルト質粘土（厚さ約20cm）東から西に傾斜し、中世の土器を含む。第4層黒褐色細礫混じり粘土（厚さ30cm以上）東から西へ傾斜する。弥生時代後期の土器が出土している。No.3トレンチでは、第4層を切り込んで石列が認められた。中世期に造られた石列と考えられる。



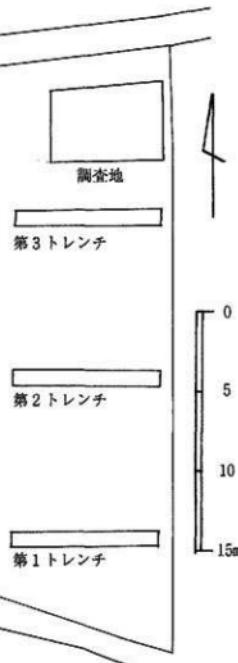
第1図 調査地位置図 (1/2500)

## 2) 基本層序

調査地の現状は、段々の水田になっているが、旧地形はかなりの傾斜をもつ扇状地状の斜面であったことが推定される。この地域がいつ頃に棚田として開発されたか詳しく述べるが、調査の結果からは少なくとも中世期には開発が始まっていたと考えられる。今回の調査地では、東側では耕土直下で地山に達し、西へかなりの傾斜をもっていたことがわかる。西側では、水田開発に伴う客土がかなり堆積している状況が認められた。層位は、基本的には東から西へ傾斜していたが、調査地中央では、中世の開発により2~3段の段差も認められ、中世期以降開発が進んでいたことが推測できる。

基本層序は、以下のとおりであった。

- 第1層 耕土。厚さ約20cm。(現況は水田)
- 第2層 床土。約10cm。
- 第3層 暗褐色シルト質粘土、細礫混じり。客土。
- 第4層 耕土。厚さ約3~5cm。下層の水田面。水田の造成が上下2段・2時期に分けて行われたことがわかる。
- 第5層 床土。厚さ約3~5cm。下層の水田に伴う床土。
- 第6層 淡灰褐色シルト質細砂。厚さ約10cm。
- 第7層 暗灰褐色砂礫層。厚さ20cm~50cm。中世期包含層。
- 第7A層 淡褐色シルト質細砂、細礫まじり。弥生時代竪穴状遺構内埋積土。
- 第8層 黒褐色シルト質粘土、細礫混じり。地山。中世期・弥生時代の遺構面。
- 第9層 黒色シルト質粘土。



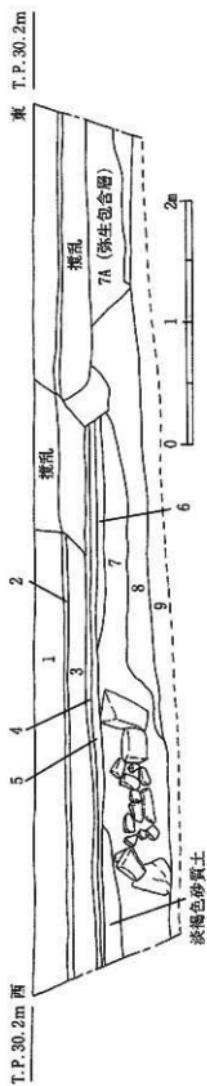
第2図 トレンチ位置図

## 3) 中世期の遺構

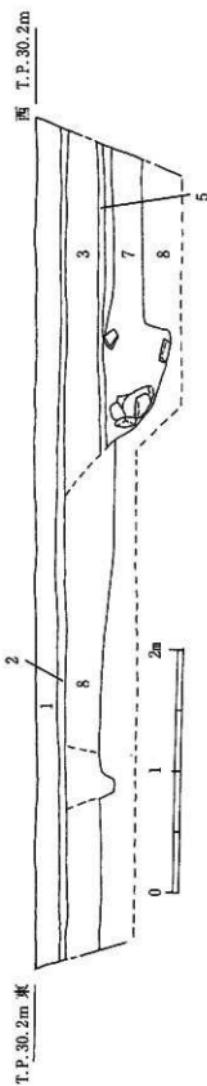
中世期の遺構は、上下2層の水田面の下層で検出した。柱穴5ヶ所、土坑2ヶ所、溝1ヶ所、石列2ヶ所などの遺構を検出した。

(柱穴) 調査地中央より東側で検出した。P1は、径約40cm、深さ20cmを測りほぼ円形を呈する。P2は、長辺36cm、短辺25cm、深さ25cmを測り梢円形を呈する。P3は、径42cm、深さ28cmを測り円形を呈する。P4は、一辺40cm前後、深さ23cmを測り隅丸方形を呈し、調査地外に広がる。P5は、SK2と重複して検出した。径35cm、深さ10cmを測り、中央に柱材と根石が認められた。柱穴は、今回の調査範囲内では不規則な配置を呈しており、建物等を復元することはできなかった。

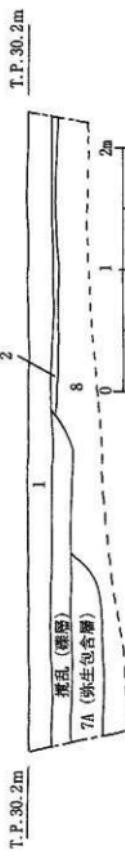
(土坑) SK3は、調査地中央で検出したもので、長辺約3m、短辺1.5~1.7m、深さ約0.24mを測る長方形形状の土坑である。内面は、皿状に凹み底面は平坦であったが、内部からは細かな土器片や礫などが出土しているのみで炭化物や遺構の性格を伺わせるものは検出できなかった。



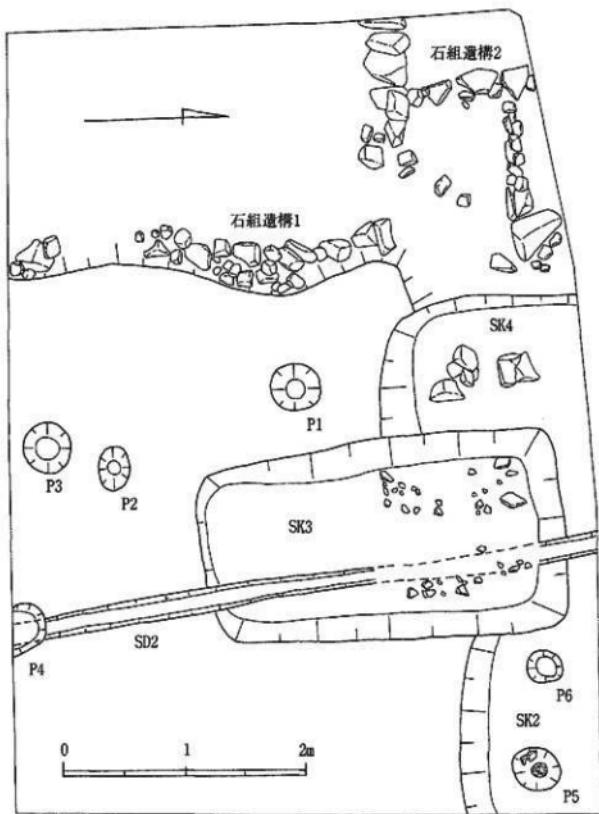
第3圖 北壁斷面圖



第4圖 南壁斷面圖



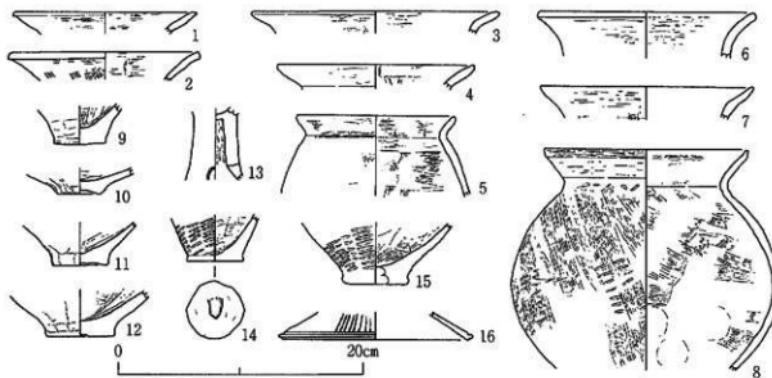
第5圖 東壁斷面圖



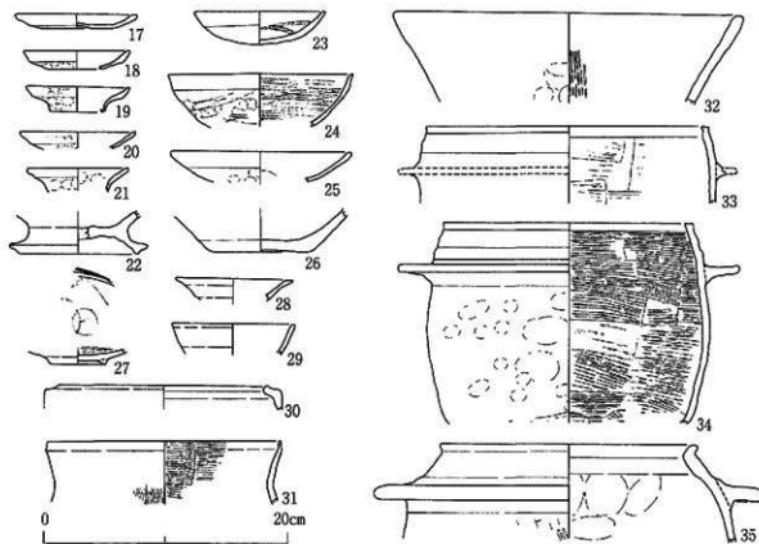
第6図 調査地平面図

SK4は、調査地中央北端で検出したもので、SK3と重複している。検出した範囲では、南北17m以上、東西11.5m以上、深さ約10cmを測る規模で、さらにトレンチ外に広がっている。内部より人頭大の礫が検出されているが、混入したものと考えられ、性格を伺える遺物は検出されなかった。

(石組造構) トレンチ西側で南北方向から逆L字形に曲がる石組造構1とさらに鉤の手状に北側に伸びる石組造構2がある。石組造構1は、第7層をカットして石列の西側面を描えて並べ、東側に裏込め礫・土を入れて固定している。現状での石組の高さ約50cm、人頭大前後の石を2段積み上げている。石組造構2は、石組造構1の東西列から北側に鉤の手状に伸びる。石列は、西面と南面を描えて



第7図 SK 2 内出土土器実測図



第8図 出土土器実測図

積み上げている。石組遺構は、中世期の造成に伴う石垣の用途をもつと考えられる。石列を境にして、東側では柱穴や土坑などの遺構が確認されていることから建物建設に伴い、傾斜面を平坦に造成し、法面に石垣を構築したものと考えられる。また、石組遺構1の石列の間から中世期の土器が出土していることから、石組の構築は柱穴や土坑と同時期と判断される。

#### 4) 弥生時代の遺構

弥生時代に属する遺構は、調査地北東隅で検出した土坑1ヶ所とピット1ヶ所だけであった。SK2は、検出した規模で南北1.2m、東西1.5m、深さ25cmを測り、隅丸方形を呈している。西側をSK3、SK4で切られている他、北側はさらに調査地外に広がっているため、全体の規模・形状は不明である。土坑内より弥生時代後期の土器がまとめて出土した。また、床面よりピット1ヶ所を確認した。P6は、径約30cm、深さ約10cmで内部に礫が認められた。

SK2は、断面観察の結果、地山から切り込んで作られており堅穴住居等になる可能性がある。壁際の周溝などは検出されていないので、今後の資料の増加を待ちたい。

#### 5) 出土遺物

土坑2出土土器 SK2内より弥生時代後期の土器がまとめて出土した。1~5・7・8は壺である。8は、「く」の字形に屈曲・外反する口縁部に球形の体部がつく。口縁部外面は、ヨコナデ調整し、端部は受口状につまみあげる。体部外面は、叩き目のちナデないし細かな刷毛で調整を施している。6は、壺口縁部である。13・16は、高杯で、13は中空の脚部である。

中世期の遺物 試掘調査第1トレンチより、17・35、第2トレンチより22・24・27、第3トレンチより23・26の遺物が出土している。今回の調査地ではSK3より19・20が出土している他は、すべて包含層内より出土した。17~21は土師器小皿、23~25・27は瓦器椀である。24は口縁部内面に凹線が認められ、大和型に属する。23は、口径10.6cm、高さ3.4cmを測り、和泉型に属すると考えられる。28・29は白磁片、26は東播系須恵器のこね鉢、32は瓦質こね鉢である。31は土師器甕、30・35は土師器羽釜、33・34は瓦器羽釜である。

#### 6) まとめ

今回の調査地では、弥生時代と中世期の2時期の遺構が検出された。中世期の遺構は、建物跡・土坑や造成の石列などが検出され、出土土器から14世紀末から15世紀代の集落跡の一部であることが判明した。弥生時代の遺構は、中世期の造成により削平されたようで、土坑の一部を検出したのみであった。土坑2は、内部に柱跡なども検出されているので、堅穴住居の可能性が考えられ、今後の調査により弥生時代後期の集落が確認される可能性がある。



1. 調査風景



2. 石列検出状況



3. SK 3 検出状況

圖版2  
山烟古墳群第18次調査  
遺構



1. SK 2 内土器出土状況

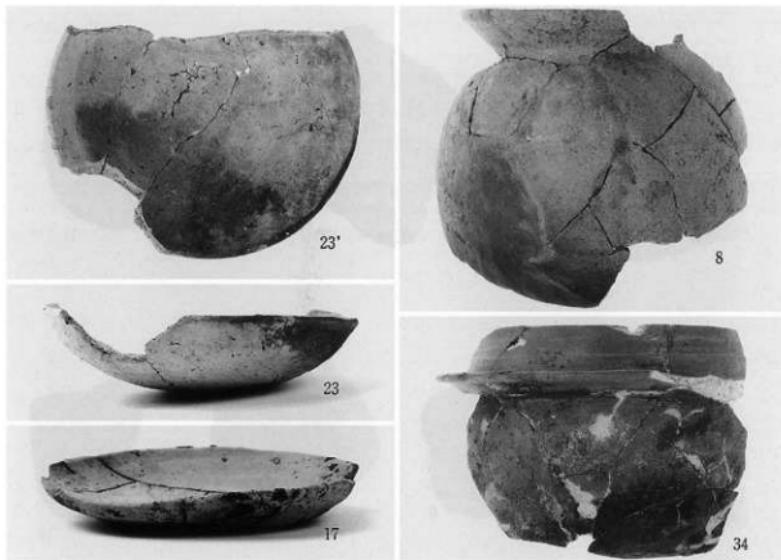


2. SK 2 内 (P5検出状況)

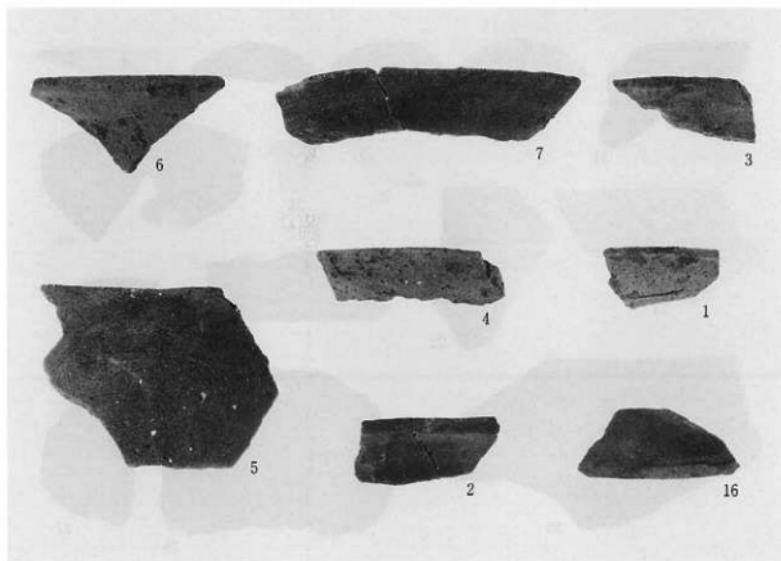


3. 調査地北東角断面

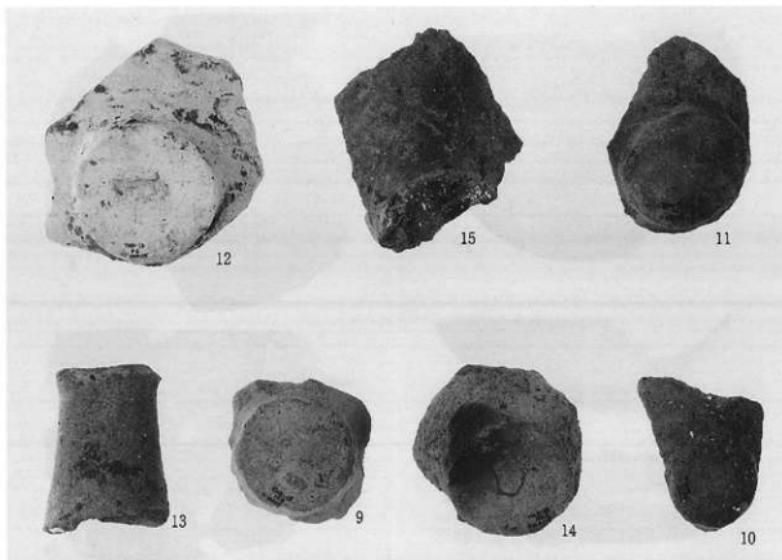
圖版3 山烟古墳群第18次調査  
遺物



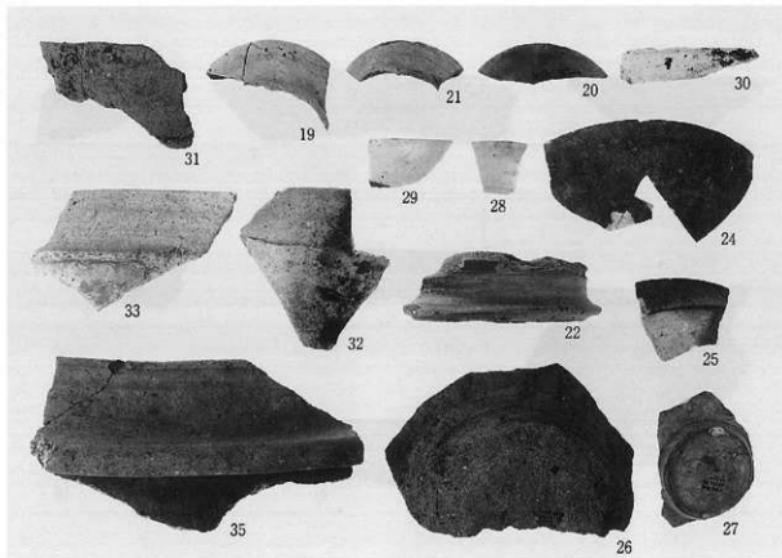
1. 土師器・甕、瓦器・羽釜



2. 弥生土器甕・高杯



1. 弥生土器甕・高杯



2. 土師器皿・羽釜・甕、瓦器椀・擂鉢・羽釜、須恵器壺・東播系捏鉢

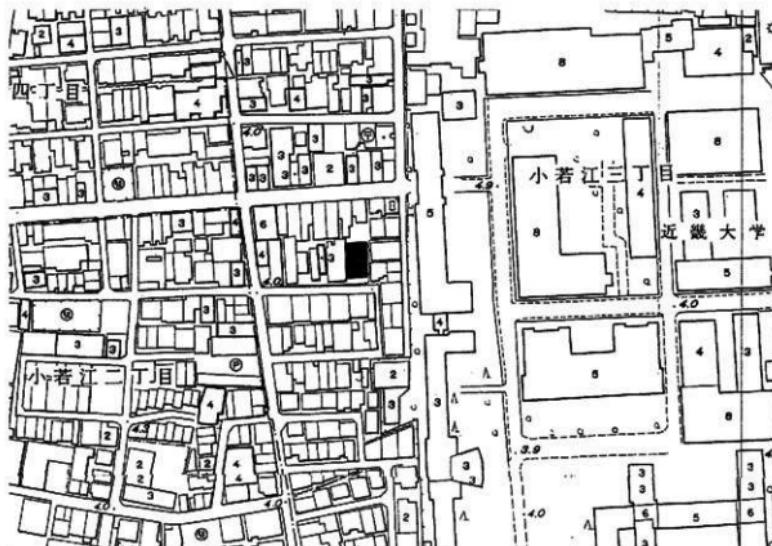
### 第3章 小若江遺跡第5次発掘調査

#### 1) 調査に至る経過

平成11年12月8日付けを以って、東大阪市小若江3丁目313-20地番において個人専用住宅の建築に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」があった。工事予定地は、周知の小若江遺跡の範囲内にあたるため確認調査を実施したところ、一部で埋蔵文化財が検出された。届出の工事は、個人専用住宅であり基礎掘削などは浅く、文化財への影響は少ないと考えられたが、一部支持杭設置部分について遺構・遺物の状況を確認するため、発掘調査を実施することになった。発掘調査は、東大阪市直営事業として、平成12年1月31日～2月1日まで実施した。調査面積は、12m<sup>2</sup>であった。

小若江遺跡は、近畿日本鉄道長瀬駅より東方約1kmに位置し、近畿大学構内を中心とする範囲に広がる集落跡である。遺跡は、昭和15年に近畿大学のグランド整備工事中に多量の遺物が発見され、この土器が古墳時代初頭の標式土器として「小若江式」の名で紹介され、注目されるようになった。その後、近畿大学構内で大学主体の発掘調査が計4回実施されている他、大学周辺でも市教育委員会主体の発掘調査が計4回実施されている。

大学構内の調査では、1974年に付属幼稚園増築工事に伴う調査で、弥生～古墳時代の遺物がまとまって出土している。大学周辺の調査では、平安時代から鎌倉・室町時代の遺構・遺物が検出されており、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。



第1図 調査地点位置図 (1/2500)

## 2) 基本層序

発掘調査は、まず敷地北東部に第1トレンチ（東西2m、南北3m）を設定し、遺構の状況を確認することにした。その結果、地表下約50cmで中世の遺物包含層を確認した他、第4層上面で溝等の遺構を確認したため、さらにトレンチを南に拡張し、第2トレンチ（東西2m、南北3m）とした。第1トレンチ、第2トレンチをつうじての基本的な層序は以下のとおりである。

盛土 厚さ約30cm。

1層 耕土（旧表土）暗オリーブ灰色シルト質細砂。厚さ約20cm。

2層 耕土（旧表土）。黒褐色シルト質細砂。厚さ約15cm。

3層 黄褐色細砂～シルト。厚さ30～40cm。

4層 にぶい赤褐色粘質シルト。厚さ約15cm。第2遺構面。

5層 オリーブ色粘質細砂、細粒砂を含む。

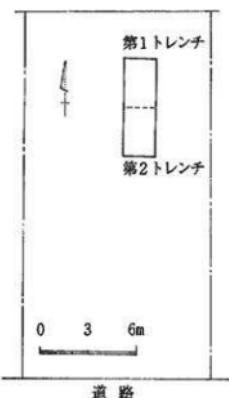
2層上面で中世～近世期の溝、土坑、ピットなど遺構を確認した。

4層上面で溝（自然流路の可能性がある。）土坑等を検出したが、出土遺物から中世期に属すると思われる。

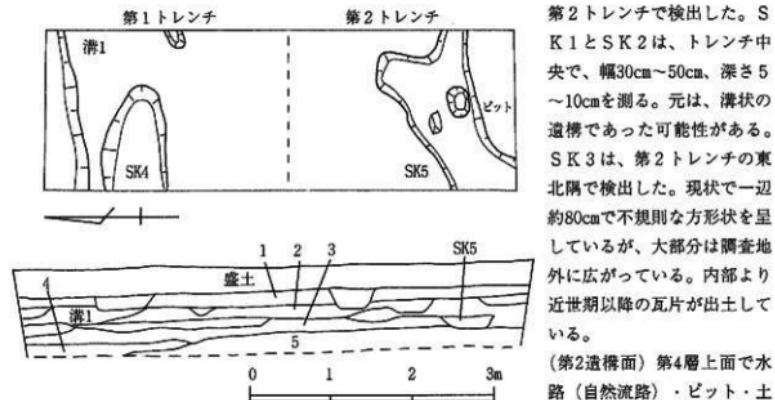
## 3) 検出した遺構

第1トレンチ、第2トレンチとも第1遺構面・第2遺構面の2時期の遺構を検出しているので、ここでは遺構面ごとに説明を行う。

（第1遺構面）第2・3層上面で、溝1箇所・ピット3箇所・土坑3箇所を検出した。溝1は、第1トレンチの北端で検出された。幅約20～30cm、深さ約10cmの規模で東西方向に検出した。下層で検出した自然流路の最終段階の状態と考えられる。ピットはP1が径約30cm、深さ約8cm、P2が、東西30cm以上、南北30cmの楕円形を呈する。P3は、径約40cm、深さ5cmの皿状の形状を呈する。土坑は、



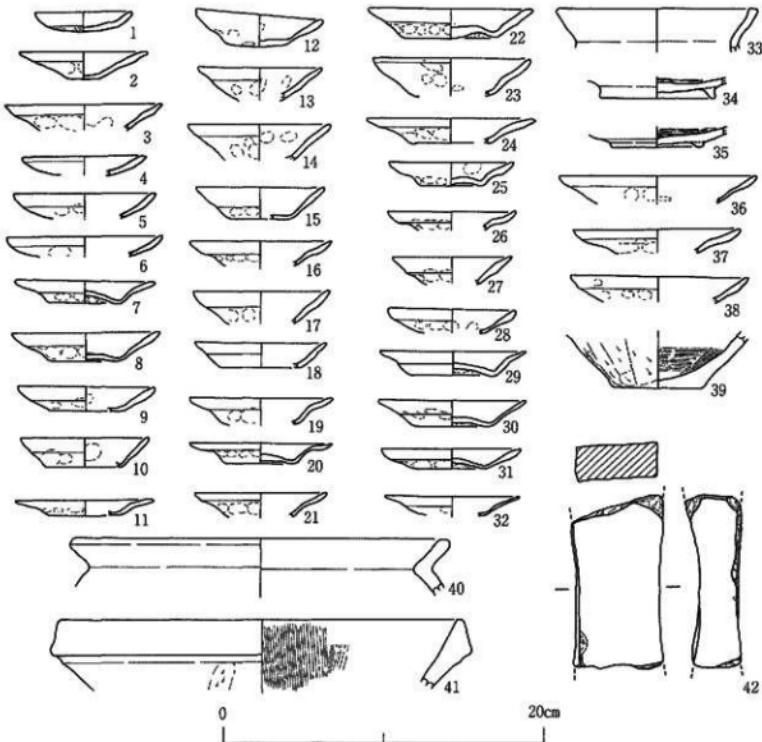
第2図 トレンチ位置図



第3図 調査地平面図・断面図

第2トレンチで検出した。SK1とSK2は、トレンチ中央で、幅30cm～50cm、深さ5～10cmを測る。元は、溝状の遺構であった可能性がある。SK3は、第2トレンチの東北隅で検出した。現状で一辺約80cmで不規則な方形状を呈しているが、大部分は調査地外に広がっている。内部より近世期以降の瓦片が出土している。

（第2遺構面）第4層上面で水路（自然流路）・ピット・土坑などを検出した。SK4は、



第4図 出土遺物実測図

第1トレンチで検出された。東西130cm以上、南北80cm、深さ約10cmを測り、トレンチ外にさらに伸びている。自然の落ち込みとも考えられる。SK 5は、第2トレンチ南端で検出した。幅80cmで東西に歪な形で広がり、深さ約5cmと浅く、底部は平坦であった。内部より土師器小皿10数枚が出土しているが、中でも完形に近い7~8枚が、土坑北面に沿って置かれた状態で出土している。また土坑中央南端に、長辺約30cm、短辺約30cmの隅丸方形状のピットが検出され、内部より銭貨6枚が出土した。銭貨はピット内の上層、下層のいずれからも出土している。容器や骨などの痕跡は認められなかったが、木製の容器の存在が想像される。銭貨6枚は、劣化が著しく判読不明のものが多かったが、その内2枚は永樂通宝であることが判明した。

#### 4) 出土遺物

出土遺物には、土師器壺・皿・摺鉢・羽釜、瓦器、砥石などがある。

33は、布留式の壺で混入品である。1~32は、土師器小皿で体部が大きく外反し、外面に指頭圧痕が

顕著に認められ、底部は凹んでいる。15世紀代に属すると考えられ、出土土器の大部分を占める。

7・8・15・20・28~31は、SK5の底面から出土している。

36~38は、土師器中皿。34・35は、瓦器椀底部である。39は瓦質土器。40は土師器羽釜、41は瓦質擂鉢、42は砥石である。

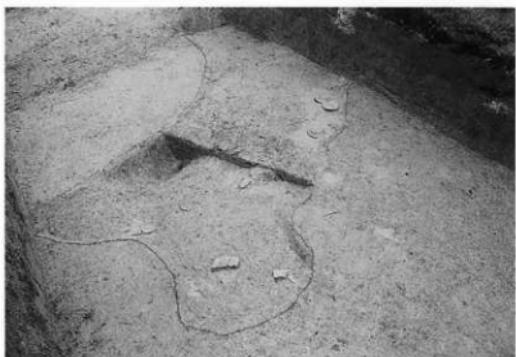
### 5) まとめ

今回の調査の結果、2時期の遺構面を検出した。第1遺構面は、近世期以降の時期であり、明確な遺構は検出できなかった。ただ、第1トレンチで検出した溝1は、第2トレンチで検出している自然流路（水路）の続いたものであり、中世期末から近世にかけて調査地付近が水田化されていたことがわかる。

第2遺構面で検出したSK5は、内部より土師器小皿が大量に出土した他、6枚の銭貨を埋納したピットを確認している。ピット内には他の痕跡は認められなかったが、木製容器などの可能性も考えられ、六文銭の存在とともに蔵骨器などの埋納遺構と考えられる。



1. 調查風景



2. SK5 内土師器小皿  
出土狀況



3. SK5 内土師器小皿  
出土狀況

図版2  
小若江遺跡第5次調査



1. SK 5内ピット完掘状況

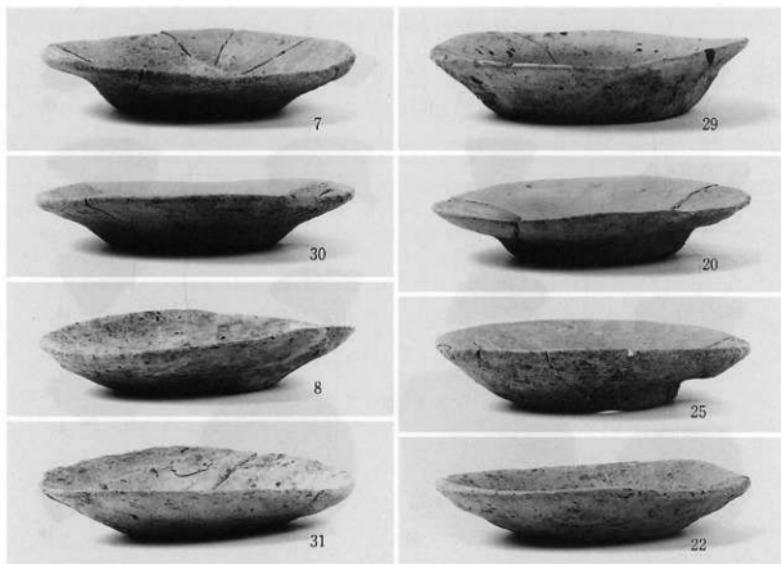


2. SK 5内(ピット内錢貨出土状況)

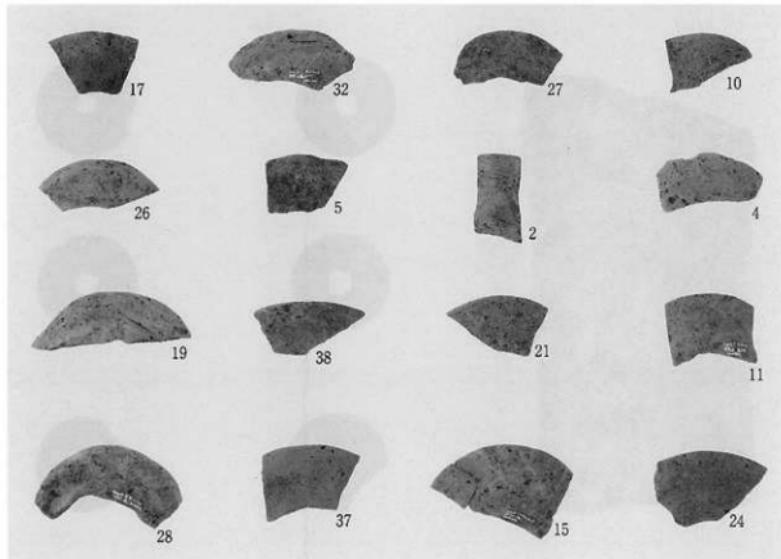


3. 第2トレンチ東壁断面

圖版3 小若江遺跡第5次調査  
遺物



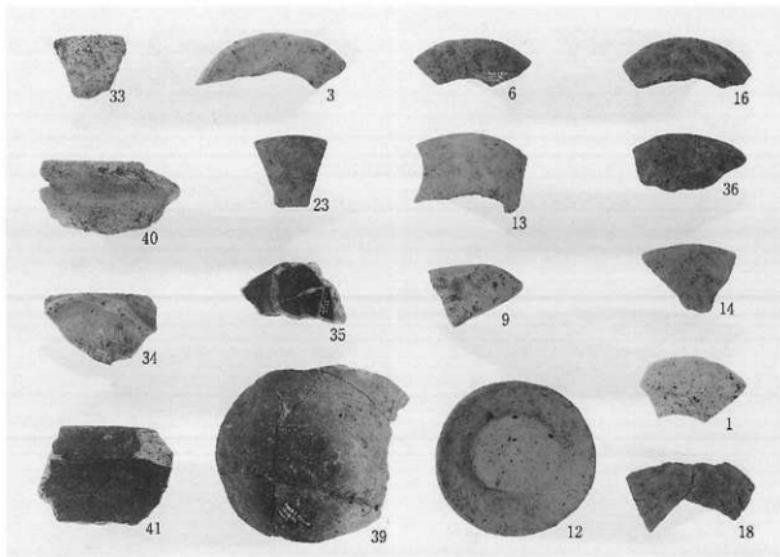
1. 土師器皿



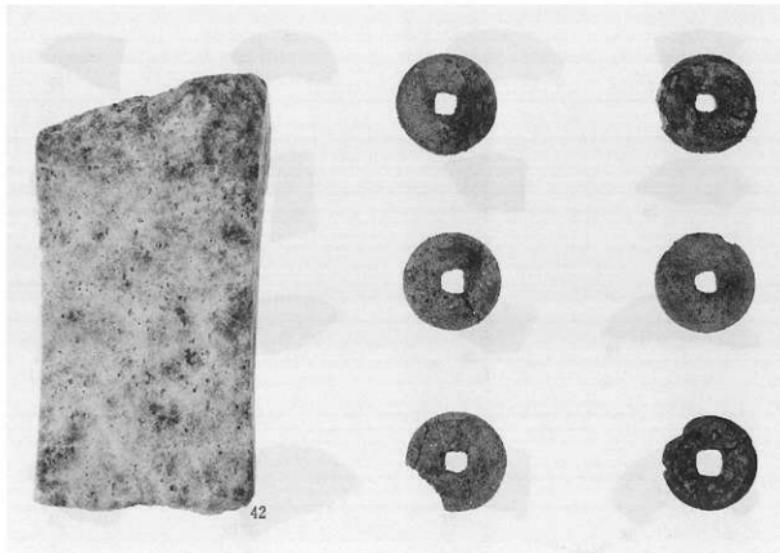
2. 土師器皿

圖版4

小若江遺跡第5次調查  
遺物



1. 土師器皿・羽釜、瓦器椀・擂鉢



2. 砥石、古錢

## 第4章 神並遺跡第25・27次発掘調査

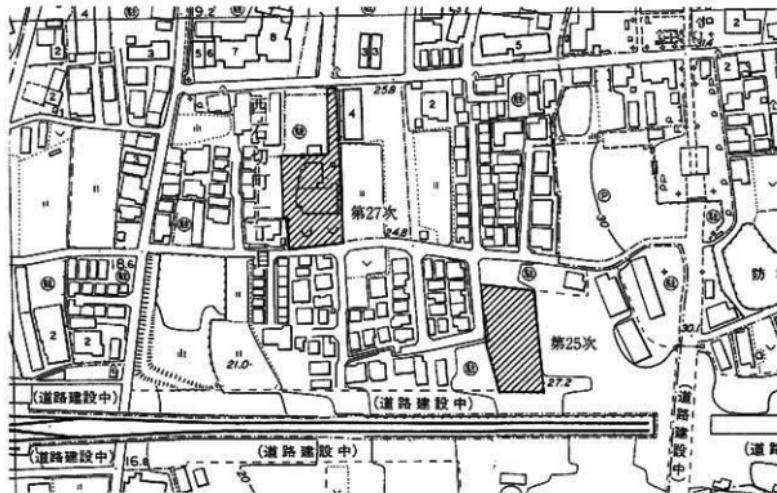
### 遺跡の概要

神並遺跡は、東石切町1丁目から西石切町1丁目にかけて広がる、後期旧石器時代末から江戸時代に亘る複合遺跡である。この地域は生駒山地西麓に見られる谷（辻子谷）から流れる河川（音川）によって形成された扇状地およびその端部にかけての緩斜面上に位置している。

昭和56年、道路および鉄道建設工事に伴う試掘調査によって遺跡として周知されて以来、今まで発掘調査は27次を数える。

後期旧石器時代末については打製石槍などが出土しているが、遺構は見つかっていない。縄文時代になると、現在の石切神社南方の新設の国道308号線周辺で早期の押型文土器、有舌尖頭器、土偶や集石土坑などの遺物・遺構が検出されている。また、後期・晩期の土器および土偶、石器も出土しているが、この時期の明確な遺構は確認されていない。弥生時代は谷の西端で土器などの遺物を包含した堆積層は検出されているが、遺構は伴っていない。古墳時代には谷内から導水施設が見つかっており、周辺部からは土器、滑石製の玉類・模造品などの遺物とともに、掘立柱建物・溝などの遺構も確認されている。

飛鳥時代の資料はそれほど多くないが、奈良時代以降は集落に伴う明確な資料が増し、東隣接地には白鳳から鎌倉時代にかけて存続した法通寺跡がある。奈良時代から平安時代後半には、須恵器、土師器などの遺物とともに掘立柱建物、溝、井戸などの遺構が検出されている。神並の名は、平安時代末期の石清水八幡宮宮寺領の河内国十五ヶ庄のひとつとして「神並庄」が記されており、この時期から鎌倉時代にかけては土師器、瓦器などの遺物と掘立柱建物、井戸、溝、土坑と耕作跡などの遺構が確認されている。室町時代から江戸時代にかけては広い範囲で耕作跡が検出されている。



第1図 調査地点位置図

## 神並遺跡第25次発掘調査

### 1) 調査に至る経過

平成11年10月19日付けで、奥林昭二氏から西石切町1丁目781-8・9、782-1・4、783、786-2において賃貸共同住宅建設の「埋蔵文化財の発掘」の届出があり、当地が昭和58年度に発掘調査を実施した鉄道・道路建設に伴う第5次発掘調査地に北接すること、建物基礎か杭基礎であることなどから、11月8日に試掘調査を実施した。その結果、奈良時代の土師器・須恵器とピット・土坑などの遺物と遺構を検出したことから、代理者を通じて協議を行ない、埋蔵文化財に影響を及ぼす杭基礎部分を対象とした発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成12年4月28日から5月26日の間行った。

調査トレンチは杭基礎部を連結させた東西2本の幅約2.5mの南北方向のもの—東トレンチ・西トレンチ—、それを南側で両トレンチをつなぐ南北方向の幅1mの南トレンチ、その南側の突出箇所2ヶ所—東南トレンチと西南トレンチ—の約161m<sup>2</sup>について発掘調査を実施した（第2図）。

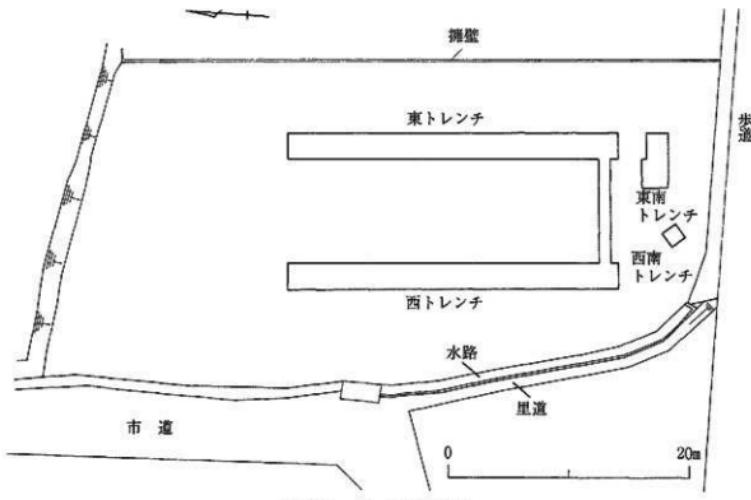
### 2) 遺構と遺物

遺構は、西トレンチおよび南トレンチでは第3・4層上面と第5層上面の2面、東トレンチでは第5層・自然流路上面のみ、東南トレンチでも第5層上面でそれぞれ検出することができた。層位と各トレンチごとの主要な遺構および遺物について記す。

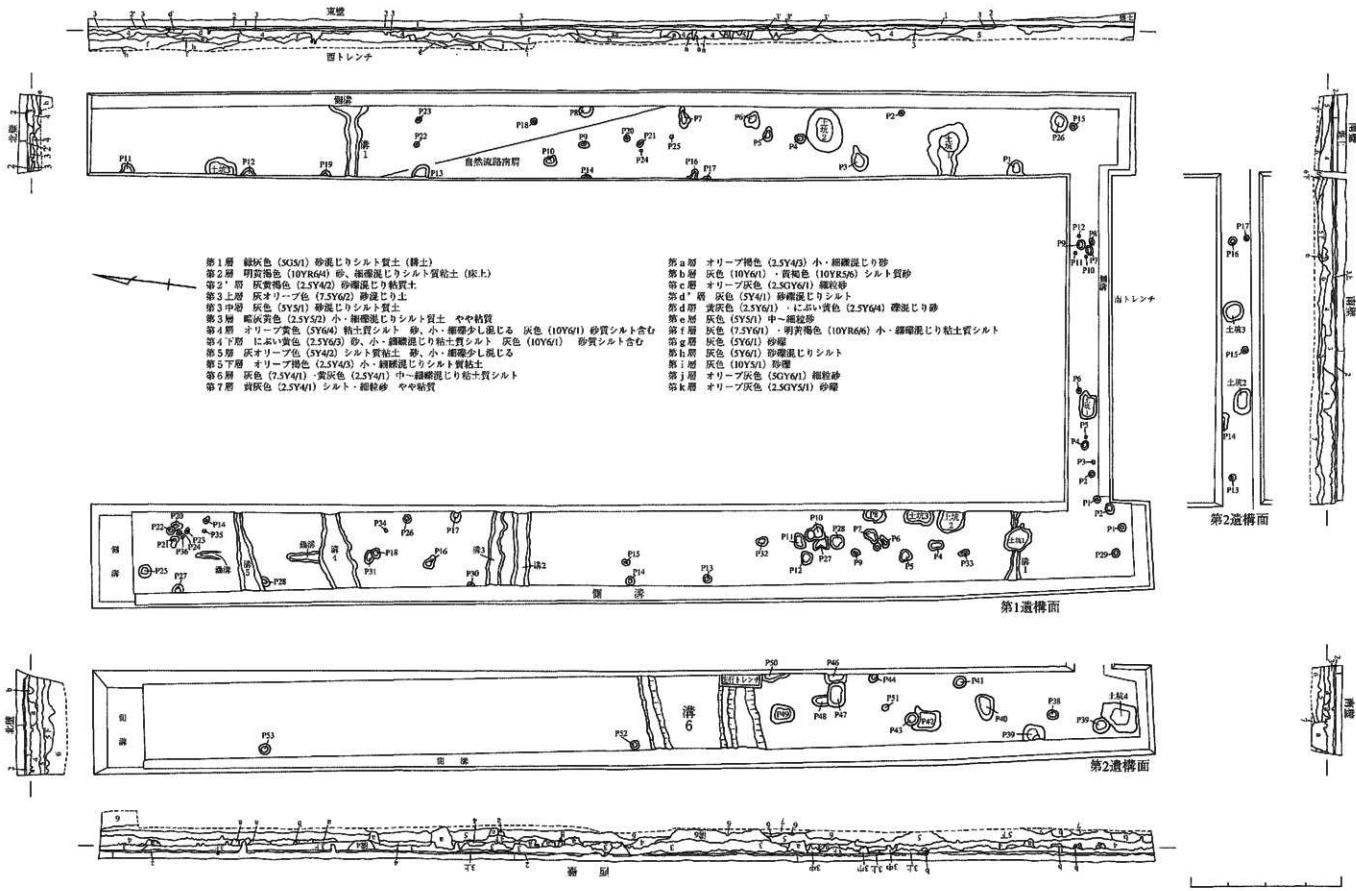
#### 西トレンチ

##### 第1遺構面（第3図 図版2）

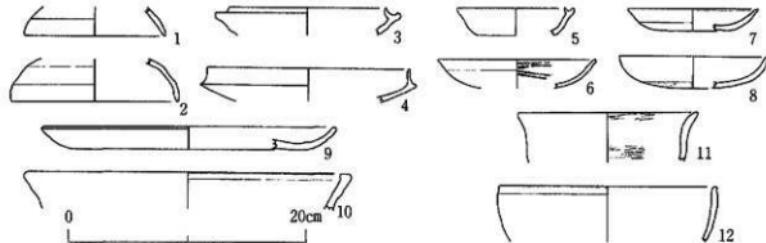
第3・4層上面で鋤溝と溝5条、土坑3基、ピット35を検出した。土坑1は近代。溝1～5はいずれも東西方向にのび、多くは第3層上面からの切り込みで、溝1・2・4からは土師器、瓦器、須恵器



第2図 トレンチ位置図



第3図 東・西・南トレンチ遺構平面図および断面図



第4図 溝6出土遺物実測図

などの細片が出土したが、江戸時代以降のものと思われ、南北方向の鋤溝もこの時期を上らない。

ピットは径0.06m前後の円形で、埋土が灰色（10Y6/1）砂混じりシルトの杭穴、径0.1~0.2mの円・不整円形などを呈するものがあった。埋土は灰色（5Y6/1）炭・砂混じり土と灰オリーブ色（7.5Y5/1）砂混じりシルト質土のものなどがあり、P2には土師器小型甕を立てて埋納していたが（図版2）、他は土師器小・細片の出土したもののがいくつかみられた。土坑2からは土師器皿細片、土坑3は無遺物であり、性格不詳。

#### ピット内出土遺物（第5図 図版5・6）

15は、P1出土の土師器皿。口縁部は丸味をもつ底部から外上方にのび端部を丸くおさめてる。

17は、P2出土の土師器小型甕。口縁部はなだらかに外反してたち、端部をややつまみ上げておさめてる。内面には粘土紐接合痕がみられ、外面にはハケメ（5/cm）を施してある。角閃石を含む。

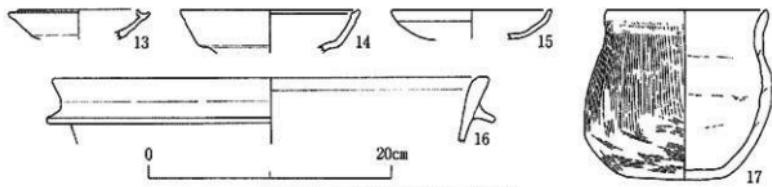
溝6は第2道構面で完掘したが、北肩は第4層上面から切り込んでいた。西トレントのほぼ中央付近においてほぼ東西方向にのびる。東トレント・南トレントで続きを検出しており、東・西のトレント間で北方向に屈曲、または終焉していると考えられる。溝幅3.1m、深さ0.34mを測り、断面逆台形状を呈し、底面西よりは少し隆起している。埋土は灰色（5Y5/1）砂混じりシルト質土で、須恵器杯蓋・杯身・皿・甕、土師器杯・高杯・皿、土師質羽釜、黒色土器椀、馬の歯などが出土した。

#### 溝6の主な出土遺物（第4図 図版5・6）

1・2は須恵器杯蓋。蓋にみられる稜はヨコナデによってつくられたにとどまる程度におわる。3~5は須恵器杯身。3はたちあがりが短く内傾し、口縁端部をやや丸くおさめてる。4は外面底部に灰かぶりが見られる。5はたちあがりの消滅にともない受け部より下方気味におわって。9は須恵器皿。口縁部はやや上げ底気味の底部から外方に広がり、口縁端部は面をもつ。外面底部にロクロヘラケズリ、内面にロクロナデの後に一定方向のナデ調整を施して。10は須恵器甕。口縁部は直線的に外方へ広がり、口縁端部を内方に屈曲させてる。6~8は土師器皿。6は内面にヘラミガキ調整が見られる。7は口縁部がやや上げ気味の底部から外方に広がり、口縁端部は内側に段をもつ。8は丸味をもつ椀状の形態をする。11は土師器小型甕。なだらかに外反する口縁部をもつ。内面にはハケメ（7/cm）調整を施して。12は土師器杯身。口縁部は内傾気味にたち、端部を丸くおさめてる。外面に粗いヘラミガキを施して。

#### 第4層出土遺物（第5・6・7図 図版5~7）

14は須恵器甕。口縁部は頸部から屈曲して段をなし外方に広がり、端部の内側に段を有する。16は土師質羽釜。口縁部は直線的に外方に広がり、端部は内側に肥厚し凹む。口縁部直下に退化気味の鉗がつく。18~22・26・27は須恵器杯蓋。18・19はヨコナデによってつくられたにぶい稜をもち、内面



第5図 各遺構内出土遺物実測図

天井部に一定方向のナデ調整を施してゐる。21は低く平らな天井部と、口縁端部内面に凹線状の段をもつ。口径13.4cm。22はヨコナデによってつくられたにぶい稜をもち、外面天井部にロクロヘラケズリが施してゐる。26・27はつまみの付く蓋。口縁端部を下方へ屈曲させて段をもつ。28~30・34~37は須恵器杯身。28はたちあがりが受け部とほぼ同一線状にまで退化。29・30・34は体部が「ハ」の字形に広がり、底部に断面台形状の高台をもつ。35・37は杯蓋を逆転させたような形態をなす。ともに内面底部に一定方向のナデ調整が施してゐる。36は口縁部が平らな底部から直立気味にたつ。31・32は須恵器高杯。31の杯部は蓋を転用したような形態をなし、脚部は大きく「ハ」の字形に広がる。32の外面には凹線によってできた凸帯と、体部と口縁部境に稜があり、内面に灰かぶりが見られる。38・39は須恵器壺。38は口縁部が外方に広がり端部を内折させてゐる。39は口縁部が内弯気味にたちあがり、端部を外方に肥厚させてゐる。外面はカキメ調整、内面に灰かぶりが見られる。40は須恵器甕。口縁部はなだらかに外反し、端部は下方に拡張してゐる。24・33は土師器杯身。口縁部は丸味をもつ底部から内傾気味にたちあがってゐる。24には外面に黒斑が見られる。33は口縁端部内面に1条の沈線、内面に放射線状暗文が施してゐる。25は土師質土器把手。鍋の把手部であろう。41は土師器蓋。扁平な円形のつまみが付く。外面には5分割からなるヘラミガキを施してゐる。42は土師器甕。口縁部はなだらかに外反し端部は丸くおさめてゐる。角閃石含む。43は大型の土師器高杯。直線的に外方に開く体部から口縁部をなだらかに外弯させ端部を丸くおさめてゐる。外面にハケメ(4/cm)調整を施してゐる。44はサヌカイト製石製品。削器。背部に原面をもつ横型剥片。刃部は片面細部調整。重さ36.21g。

この層は遺物を多く包含しており、他に奈良時代の平・丸瓦、土師器高杯、須恵器甕、白磁碗、黒色土器椀などの破片も出土した。

#### 第2遺構面（第3図 図版3）

第5層上面において溝1条（溝6—前述）、土坑1基、ピット16を検出した。ピットは径0.15~0.25mで、埋土が灰色（10Y5/1）砂混じりシルト質土の円形のものと、隅丸長方形の大型の掘方で、浅黄色（5Y7/4）砂混じりシルト質土と灰色（5Y6/1）砂混じり砂質土の混土のものがみられた。

#### 南トレント（第3図 図版3）

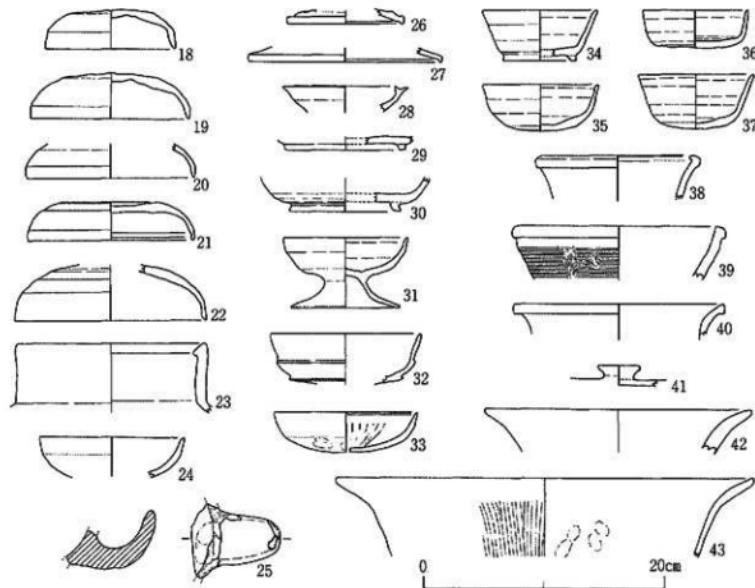
第1遺構面 第4層上面において土坑1基とピット12を検出した。ピットは径0.06m前後の杭穴と径0.15~0.2mの円形のものがあった。

第4層からは、土師器椀・皿、土師質羽釜、黒色土器椀、製塙土器などの小・細片が出土した。

第2遺構面 第5層上面において土坑2基とピット5を検出した。2基の土坑は隅丸長方形・梢円を呈し、埋土などからも西トレントP39などと関連するものと思われる。

#### 東トレント（第3図 図版4）

第1・2層を除去すると、南端部は擾乱されていて、中央から南側の大半は第5層の地山面であり、北側に第3・4層の遺物包含層がみられた。第3層からは土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器



第6図 第4層出土遺物実測図

などの小・細片が出土した。第4層は須恵器、土師器輪・皿、土師質羽釜、黒色土器輪などの小・細片を包含し、南側でも第5層上面の窪地部分などにみられた。

遺構は第5・4層（一部第3層）上面で、溝1条、土坑3基、ピット26、自然流路を検出した。

溝1は、西トレーニングの溝4につながり、江戸時代以降のものと思われる。ピットは径0.1m前後のものと、径0.2mなど円、不整円・橢円のものがみられ、土器小・細片を出土したものもあり、中世以前の杭・柱穴と考えられるが、明確な建物状況・時期などは不明。土坑は橢円の鉢状を呈する土坑2などがあり、土師器細片が出土したのみで、性格・時期不明。

遺構内出土遺物（第5図 図版5）

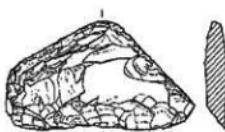
13須恵器杯身片はP1出土。たちあがりは短く内傾し、口縁端部をやや丸くおさめてる。

他にP3から土師器、P10から須恵器・土師器、P17から須恵器、土坑1から土師器の細片出土。

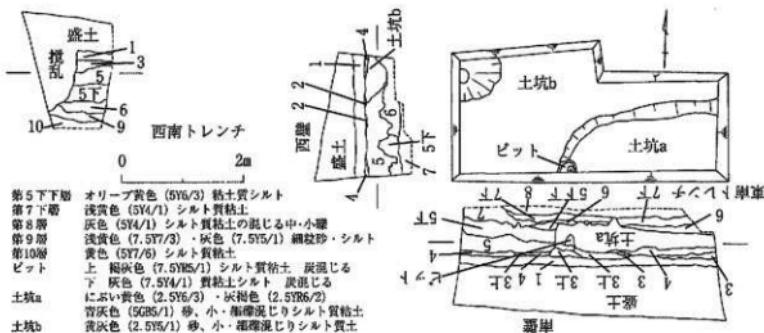
自然流路は、トレーニング中央付近から北側の第5層上面において南肩を検出した。東側で幅14m、西側で8.2mを測り、南南東から北北西にのびてた（西トレーニングにはない）。流路内は南肩から緩やかに傾斜して下り（背）、シルト、砂、礫が堆積していた。遺物は全く出土せず、明確な時期は不明。

東南トレーニング（第8図 図版4）

南側国道に向けての傾斜面に位置し、盛土が厚い。第1層を



第7図 出土石器実測図（1/2）



第8図 西南トレンチ断面図および東南トレンチ平面図・断面図

除去すると南部で薄く第3・4層などは残存していたが、大半は第5層面であった。第3・4層からは須恵器、土師器皿・羽釜、瓦器椀、黒色土器椀などの小・細片が出土した。第5層上面においてピット1と2基の土坑を検出した。

ピットは第5層および土坑a上面で検出。埋土は上下2層に分かれ、炭が混じっていた。土坑aは本来梢円形を呈していたと思われ、須恵器杯・壺、土師器高杯・杯・皿・羽釜、黒色土器椀・瓦器椀などの破片が出土した。土坑bはやや梢円状の擂鉢形を呈していたと思われ、埋土内からは土師器細片が出土した。

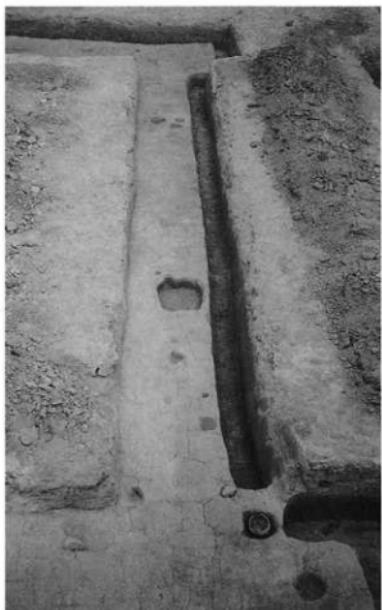
#### 西南トレンチ（第8図）

範囲も狭く、南側国道に向けて盛土が厚い上に約1/3は搅乱を受けていた。そのため遺物はほとんど出土せず、構造もなく、層位の確認にとどまった。

#### 3) まとめ

今回の調査においては、奈良時代以前の隅丸長方形掘方のピット群など（第2構造面）、平安時代後半～鎌倉時代の溝とピット群、室町時代の明確な構造ではなく、江戸時代以降の溝群と小ピット（第1構造面）などを確認した。このことから、打製石器は出土しているものの、当該地は古墳時代および奈良時代に建物群が形成され、平安時代後期から鎌倉時代にかけても再度集落の一部をなしていたが、室町時代以降は荒地（？）と化し、江戸時代には耕作地であったと考えられる。

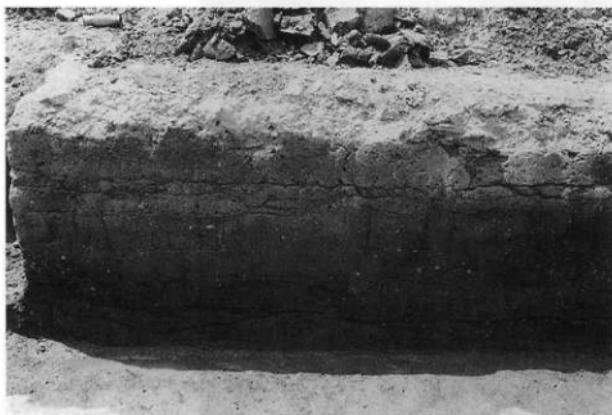
図版1  
神並遺跡第25次調査  
遺構



南トレンチ第1遺構（西より）

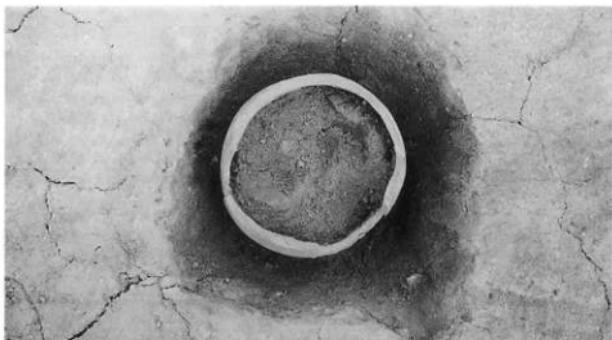


南トレンチ第2遺構（西より）



南トレンチ南断面（部分）

図版2 神並遺跡第25次調査 遺構



西トレンチP2土器検出状況



西トレンチP2断面（北より）



西トレンチ第1遺構（北より）

図版3 神並遺跡第25次調査 遺構



西トレンチ第2遺構（南より）



西トレンチ西断面（部分－南側）



西トレンチ西断面（部分－中央）



東トレンチ遺構（北より）



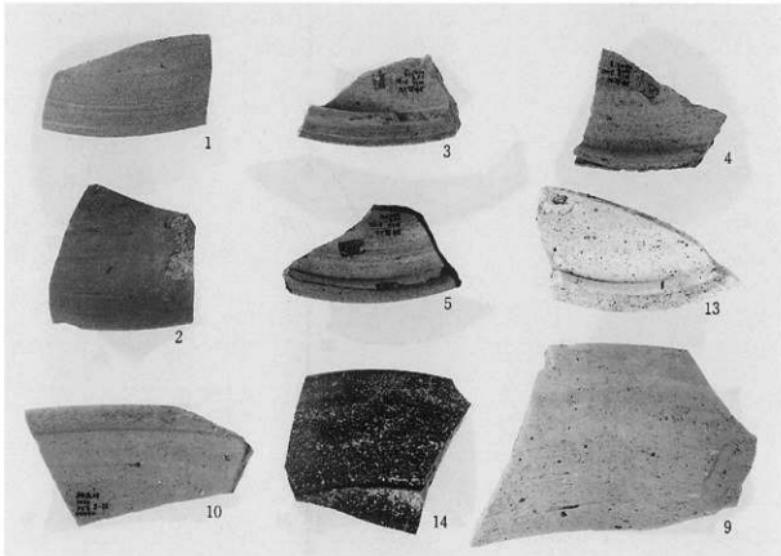
東トレンチ東断面（部分）



東南トレンチ南断面

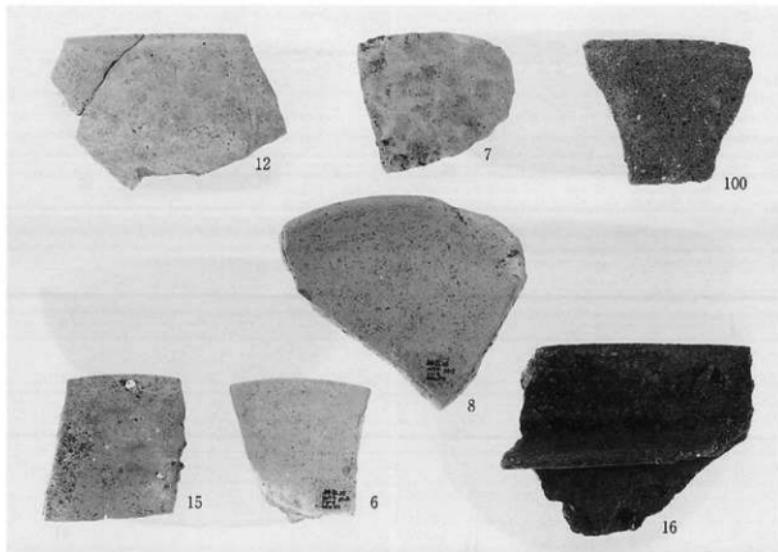


P 2 出土土師器甕（17）. 第4層出土須惠器高杯（31）杯身（35・36）

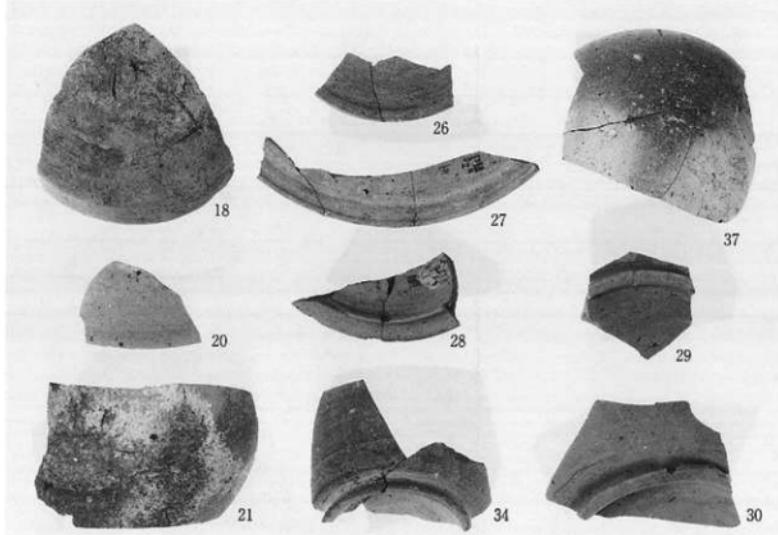


清6 出土須惠器杯蓋（1）須惠器杯蓋（2）杯身（3～5）皿（9）甕（10）.  
P 1 出土須惠器杯身（13）. 第4層出土甕（14）

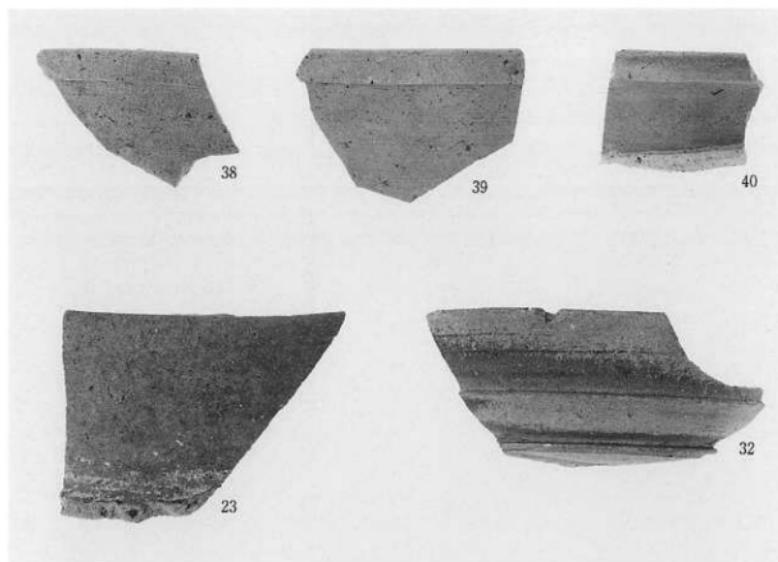
圖版 6 神並遺跡第25次調查  
遺物



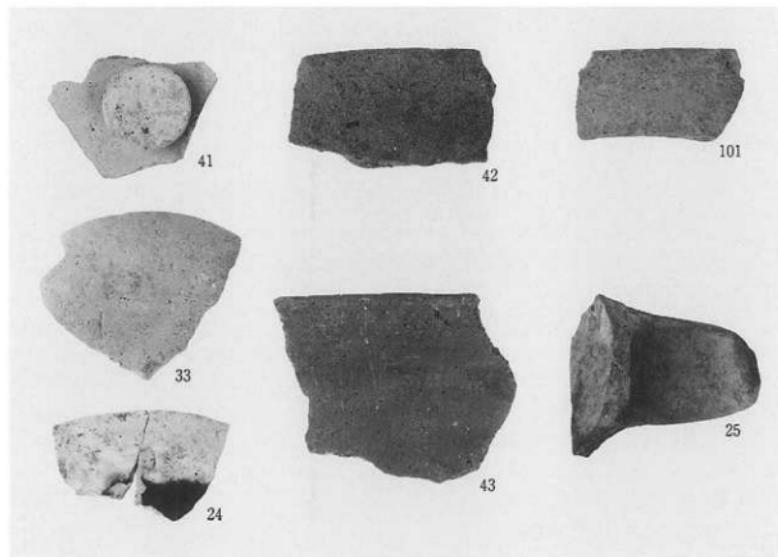
溝6出土土師器皿（6～8・12）.Pit 1出土土師器皿（15）.第2・5層上面出土土師器羽釜（16）.溝6出土土師器壺（100）



第4層出土須惠器杯蓋（18・20・21・26）杯身（28～30・34・37）須惠器杯蓋（27）



第4層出土須恵器壺（23）高杯（32）壺（38~40）



第4層出土土師器壺（24・33）鉢把手（25）杯蓋（41）壺（42）高杯（43）鉢（101）



## 神並遺跡第27次発掘調査

### 1) 調査に至る経過

平成12年10月18日付けで木積一仁氏から、西石切町1丁目31、32の一部、37、38の一部、39-1、39-2の一部において賃貸の共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財の発掘」の届出があった。当該地は平成9年に実施した第18次発掘調査地にあたり<sup>四</sup>、当時の設計計画を変更して再度の届出であったことから、代理者を通じて協議を行ない、未調査部分について発掘調査を実施することになった。発掘調査は12月16日から29日の間行なった。

今回の調査は、第18次調査区の東側の調査地区を1トレンチとし、さらに盛土除去後に検出した旧建物の基礎コンクリート壁を境にして東から1~4のブロックに分け、第18次調査区の南側の調査地区を2トレンチとし、計110m<sup>2</sup>について、12月16日から29日までの間発掘調査を実施した。

(註)『神並遺跡第18次発掘調査報告』『神並遺跡発掘調査報告集—第9・10・18・19・22次調査—』財團 法人東大阪市文化財協会 2000・6

### 2) 遺構と遺物

遺構は1トレンチで、第3層上面において2条の南北方向の溝、第4層上面において南北方向の溝を3条、第5層上面において6~7条の溝および多数のピットを、2トレンチで第3層上面で2条の溝、第5・6層上面で溝・ピット・土坑・落ち込みを確認、検出した。

遺物は、土師器皿、土師質羽釜、須恵器杯身・壺、東播系須恵器捏鉢・鉢、瓦質擂鉢・羽釜・壺、國產陶磁器、輸入磁器、弥生土器、石製品、鐵製品、サヌカイト剝片などが出土した。以下、トレンチごとに層位・出土遺物と遺構について記していく。

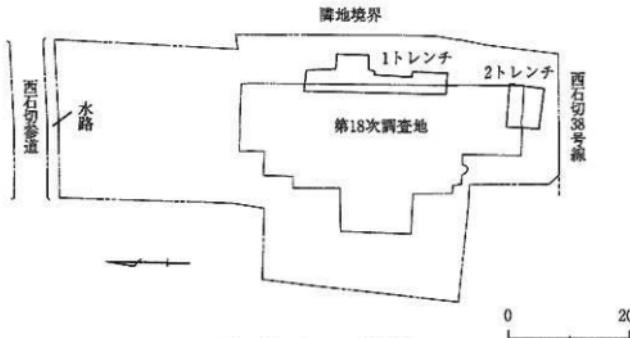
#### 1トレンチ

1トレンチ西側約2/5は第18次調査で実施済み。以下、層位および各層から出土した主な遺物と遺構について記していく。

##### 層位(第2図 図版1・2)

##### 盛土

第1層 灰色(7.5Y5/1)砂混じりシルト質土。現・近代の耕作土。



第2層 明赤褐色（5YR5/6）・灰黄色（2.5Y6/2）砂質シルト。近世の耕作土。土師器皿、土師質羽釜、瓦器椀、瓦質羽釜、黒色土器椀、須恵器甕、青磁碗、國産陶磁器などの中～細片出土。

#### 第2層の主な出土遺物（第3図 図版3）

5は、輸入磁器の青磁碗。口縁部外面に雷文帯をめぐらしてある。口径15.6cm。9は、瓦質甕。短く直立気味に立ち上がる頸部から口縁部はそのままつづいており、端部は外上方にわずかに拡張して玉縁状を呈している。外面にタタキ目、内面はハケメ（3/cm）調整を施してある。口径34.4cm。

#### 第3層 灰黄褐色（10YR5/2）砂・小・細礫混じり粘土質シルト。

1トレンチ1～2の上面において幅0.15m、深さ0.03～0.05mの南北方向の鋤溝を確認した。江戸時代の耕作跡。

層内からは、土師器皿、土師質羽釜、瓦器椀、瓦質擂鉢・羽釜、東播系須恵器捏鉢、須恵器杯、綠釉陶器椀、衛前焼擂鉢などの中～細片出土。

#### 第2・3層の主な出土遺物（第3図 図版3）

2は、綠釉陶器椀。高台端面に段、内面見込みに1条の沈線がある。内外面に暗オリーブ色の釉が見られる。高台径5.6cm。6は、瓦質擂鉢。内面に擂目（7/2.3cm）が見られる。底径13.8cm。7は、土師器羽釜。口縁部は内傾し、端部を外方に短く折り返して丸くおさめてある。口径17.6cm。

第4層 オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂・小・細礫混じりシルト質土。やや粘質で褐色（7.5YR4/3）砂粒を含む。

1トレンチ1～3の上面において、南北方向の幅0.7～0.87m、深さ0.05～0.07mの幅広の溝2条と幅0.3m、深さ0.07mの溝1条を確認した。室町時代の耕作跡。

この層からは土師器皿、土師質羽釜・甕、須恵器杯・甕、東播系捏鉢、瓦器椀、瓦質羽釜・火舎、黒色土器椀、青磁碗（龍泉窯）、白磁碗、瓦、鉄釘、弥生土器、磨製石包丁、サヌカイト剥片などの中～細片出土。

#### 第4層の主な出土遺物（第3図 図版3）

1は、土師器皿。口縁部は外方に開き、端部をやや尖り気味におさめてある。口径8.2cm。第3層出土。3は、須恵器杯身。高台は「ハ」の字形に広がり、端部は面をなす。高台径8.1cm。4は、磨製石包丁。回転穿孔による縦穴が見られる以外は欠損および風化のため詳細不明。綠泥片岩。8は、東播系須恵器捏鉢。口縁部は外方に広がり端部を上下に拡張してある。内外面ともナデ調整、口縁部には釉が見られる。口径26.2cm。

#### 第5層 明黄褐色（10YR6/6）粘土・暗灰黄色（2.5Y5/2）砂混じりシルト質粘土。

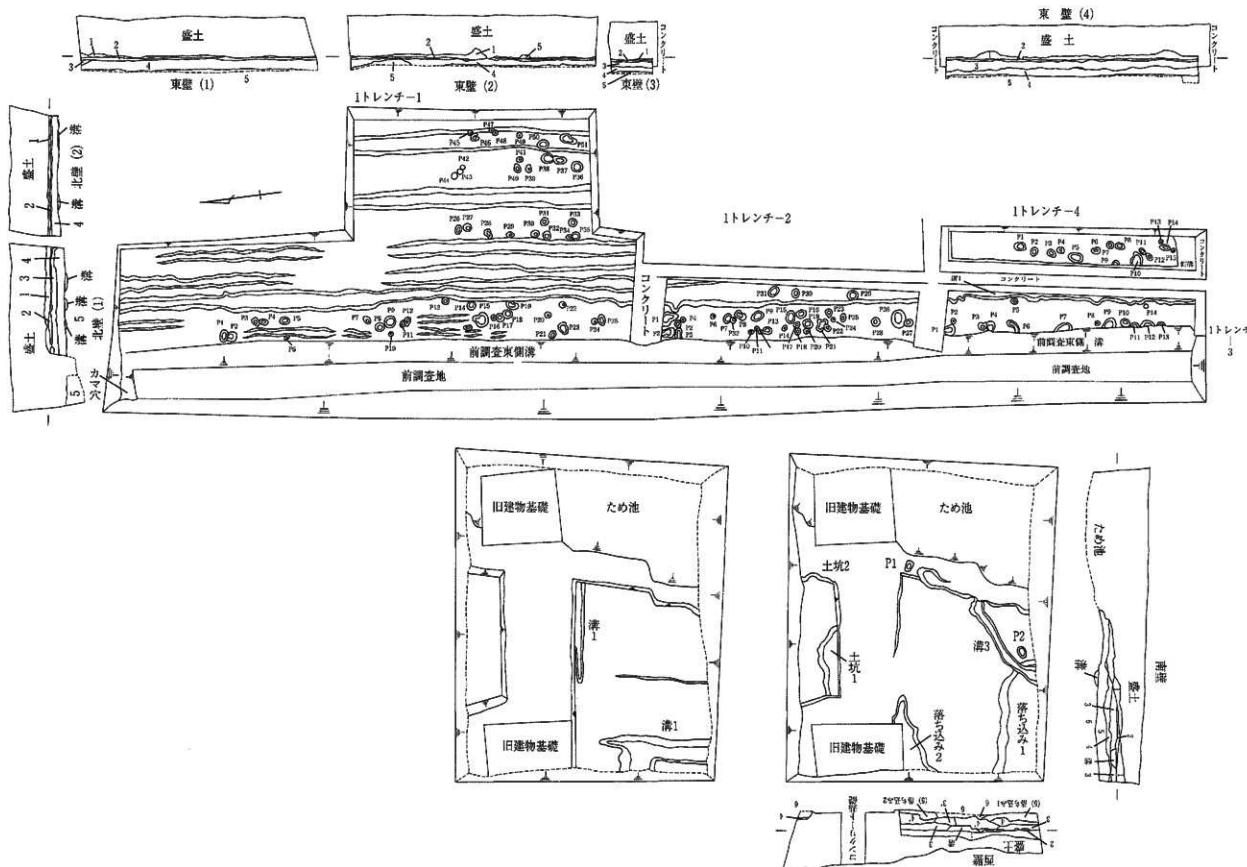
#### 第5'層 黒褐色（7.5YR5/2）中・小礫混じりシルト質粘土。地山。

#### 第5、5'層上面造構（第2図）

#### 1トレンチー1（図版1）

南北方向の溝7条と、ピット51を検出し、溝は西から溝1・溝2…溝7とした。

溝1は、北および南ではなく、途中で幾度となく途切れてる。幅0.32～0.1m、深さ0.03mを測り、須恵器、土師器皿、土師質羽釜などの小・細片が出土した。溝2は、南ではなく途中で大きく途切れてる。幅0.3～0.14m、深さ0.03mを測る。溝3は、幅0.7～0.3m、深さ0.06mを測り、須恵器、土師質羽釜の小・細片が出土した。1トレンチー2・3の各溝1につづいている。溝4は、途中で途切れてる。幅0.6～0.28m、深さ0.07mを測り、須恵器、土師器皿、黒色土器椀、瓦器椀などの小・細片が出土した。溝5は、北および途中で途切れてる。幅0.6～0.18m、深さ0.09mを測り、土師器の小・細片が出土した。溝6は、幅0.76～0.6m、深さ0.08mを測り、土師器皿、黒色土器椀などの小・細片が出土し



第2図 各遺構平面図・断面図および主要ピット平面図

た。溝7は、幅0.7~0.6m、深さ0.04mを測り、須恵器、土師器皿、土師質羽釜、黒色土器碗、瓦器碗などの小・細片が出土した。

溝1・3・5・6・7の埋土は灰色(10Y5/1)砂・細礫混じりシルト質土で、各溝の間は1.2~1mを測った。溝2・4の埋土はオリーブ灰色(5GY5/1)砂・細礫混じりシルト質土、溝間1m。

ピット群51のピットは、径0.12m前後の円・不整円、径0.2~0.4mの円・不整梢円で、深さは0.12~0.05mを測った。ピット内からは遺物はほとんど出土しなかつたが、ピット群は上記の溝によって切られたり、溝内でも検出しており、各溝よりも先行する遺構である。ピット間で切り合いのみられるものがあり、暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂・細礫混じり土を主とするもの、暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・細礫混じりシルト質土を主とするもの、灰色(5Y4/2)砂・細礫混じりシルト質土を主とするものがみられたが、建物状況は不明。

#### 1トレンチー2(図版2)

溝1条とピット群を検出した。溝は、南北方向にのび、西肩および東肩の一部を検出した。検出幅は0.4m、深さ0.07mを測る。埋土は灰色(10Y5/1)砂・細礫混じりシルト質土で、須恵器、土師器皿、黒色土器碗、瓦器碗などの小・細片が出土した。1トレンチー1の溝3、—3の溝1につながる。

ピット群は径0.06~0.12mの円・不整梢円、径0.18m前後の円・不整梢円、長辺0.28~0.2mの不整隅丸長方形で、深さ0.05~0.13mを測った。ピット状況は1トレンチー1と同様。

#### 1トレンチー3(図版2)

溝1条とピット群を検出した。溝は南北方向にのび、西肩のみを検出し幅などは不明。埋土は灰色(10YR5/1)砂・細礫混じりシルト質土で、土師器皿などの小・細片が出土した。1トレンチー溝3および—2の溝のつづき。

ピット群は径0.12m前後の円、0.2m前後の円・不整梢円、長辺0.3m前後の不整隅丸長方形、深さ0.05~0.16mのものなどがみられた。ピット状況は1トレンチー1と同様。

#### 1トレンチー4(図版2)

ピット群のみを検出。径0.1m前後の円、径0.2m前後の円・不整円、長辺0.3m前後の不整隅丸長方形のものなどがみられた。ピット状況は1トレンチー1と同様。

#### 2トレンチ

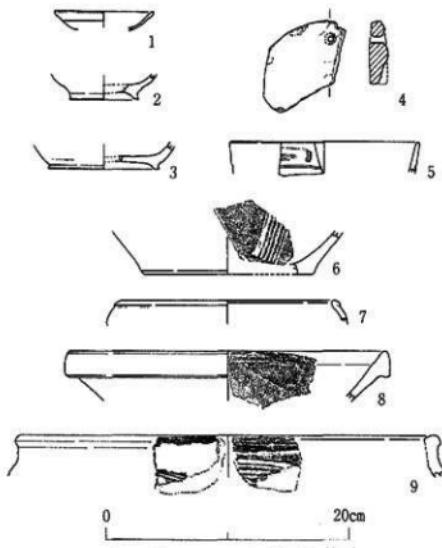
トレンチ北側は第18次調査済み、東北側・西北側には旧建物のコンクリート基礎残存、東側は近・現代のため池などであった。

#### 層位(第2図)

#### 盛土

第1層にぶい黄褐色

(10Y5/4)・灰色(5Y5/2)砂混じり砂質シルト。  
土師器皿、須恵器などの小・細片が出土。近世の耕



第3図 出土遺物実測図

土。1トレンチ第2層相当。

第2層 灰色（7.5Y5/1）中・小礫混じり砂質土。上面に褐色（7.5YR4/4）砂質シルトがみられる。

第3層 オリーブ黒色（5Y3/1）中・細礫混じり粘土質シルト。1トレンチ第3層相当。

第3'層 暗緑灰色（7.5GY3/1）小・細礫混じり粘土質シルト。

第4層 黒褐色（2.5Y3/1）中・小礫混じりシルト質土。土師器皿、黒色土器などの小・細片出土。

1トレンチ第4層相当。

第4'層 灰色（5Y4/1）砂・小・細礫混じり粘土質シルト。

第5層 灰色（10Y4/1）シルト質粘土、にぶい黄色（2.5Y6/4）砂礫の混層。

第6層 黄褐色（10YR5/6）・緑灰色（10GY5/1）中～細礫混じりシルト質粘土。

第1遺構は、第4・4'層上面で、2条の溝を検出した。

溝1は、東西方向にのび、後世の搅乱などによって切断され、南肩と北肩の一部を検出した。検出の長さ2.1m、幅0.18m、深さ0.03mを測る。埋土は黄褐色（2.5Y5/4）・暗オリーブ色（5GY4/1）小・細礫混じり砂質土。溝2は、「ト」の字形を呈し、幅0.7～0.2m、深さ0.08mを測る。埋土は溝1と同じ。ともに埋土内からは遺物が出土していないが、検出層、1トレンチ状況から室町時代の耕作跡と思われる。

第2遺構は、第6層上面で、ピット2、溝2条、落ち込み2基、土坑2基を検出した。

P1は、0.14×0.2mの不整梢円を呈し、深さ0.04mを測る。埋土は暗青灰色（7.5GY4/1）小・細礫混じりシルト質土。P2は0.15×0.2mの不整梢円を呈し、深さ0.07mを測る。埋土は灰色（5Y4/1）細礫混じりシルト質土。溝3は、南から蛇行して東、北へとのび、幅0.36～0.2m、深さ0.05mを測る。埋土は灰色（5Y4/1）小・細礫混じりシルト質土。落ち込み1は、北・東肩のみ検出。一部は溝3によって切られている。検出長2.2～0.8m、深さ0.12mを測る。埋土は灰色（10Y4/1）シルト質粘土。

落ち込み2、土坑1・2はため池、旧建物建設などの後世の搅乱によって削平・切断され、本来の形状など不明。また各遺構内および検出層などからは全く遺物が出土しておらず、時期などを確定できなかった。

### 3) まとめ

今回の調査では、1トレンチで3面、2トレンチで2面の遺構を確認した。一部時期を確定できなかつたが、江戸時代、室町時代および平安時代後半から鎌倉時代の耕作跡と、多くは耕作形成以前のものと考えられる3時期以上のピット群を検出した。すでに前回の第18次調査において確認されていることであるが、当該地は、奈良時代から平安時代前半ごろには掘立柱建物を主とする住居地域であったが、平安時代後半以降は耕作地と化し、江戸時代までこの状態が続いていたことがわかった。

遺物としては、第3層の江戸時代（以降）の整地土内から、磨製石包丁と弥生後期土器片を若干出土したが、飛鳥時代以前の資料は多くない。また、奈良時代の平瓦・丸瓦片が出土しているが、これは東接する法通寺のものと考えられる。しかし、本調査では奈良時代から江戸時代にわたる多くの土器類、とくに平安～鎌倉期のものが大半をしめていた。

今後、北接する第10次調査など近隣での調査および周辺部での調査結果や文献史料などを十分検討し、本遺跡の性格を明確にしていきたいと考えている。

図版1  
神並遺跡第27次調査  
遺構



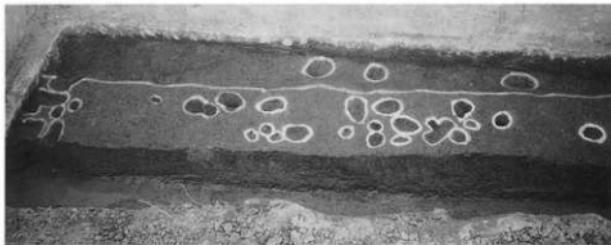
1トレンチー1（北より）



1トレンチー1東断面（部分）



1トレンチー1北断面



1 トレンチー2

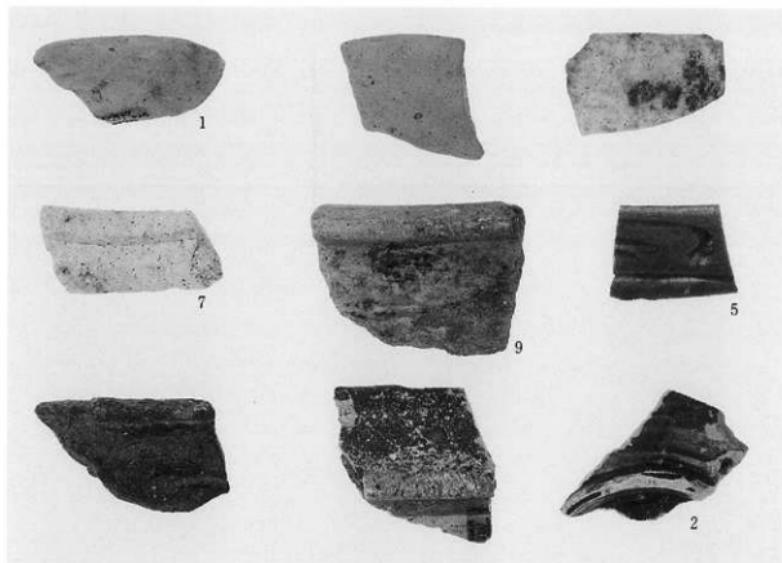


1 トレンチー3・4

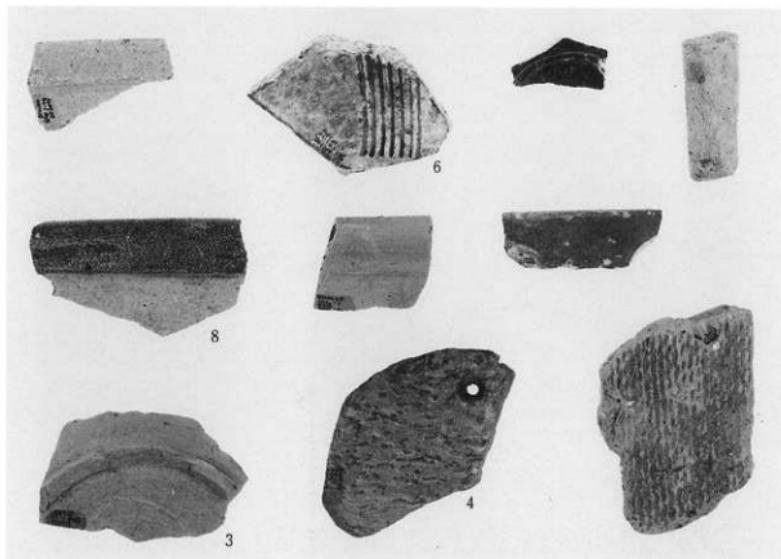


1 トレンチー4 東断面（部分）

圖版3 神並遺跡第27次調査 遺物



土師器、陶器



須恵器、瓦器、石器、瓦

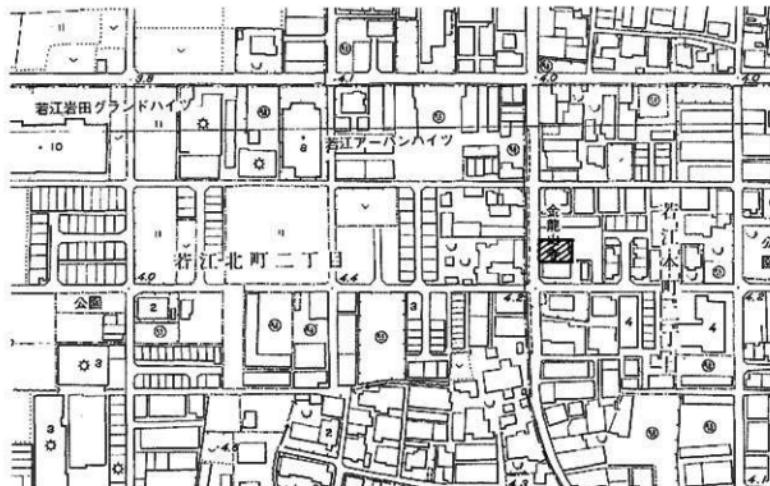


## 第5章 若江遺跡第77次発掘調査

## 1) はじめに

若江遺跡は若江本町・若江北町・南町一帯に広がる弥生時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。昭和9年の第二寝屋川改修工事のおりに弥生時代から中世の遺物が出土して遺跡として周知されるようになった。昭和40年代ごろから若江地域においても開発の波が押し寄せ、住宅・共同住宅・工場・会社・学校などの建設、府道大阪東大阪線の拡幅、下水道・ガス管埋設などの工事が行われ、それに伴う発掘調査が実施されて、昭和47年の若江小学校校舎増築工事に伴う第1次の発掘調査以来、今回の発掘調査で77次を数える。

これまでの調査などから本遺跡は弥生時代中・後期以降の遺跡である。とくに弥生時代後期には方形周溝墓や水田の畦畔、土器などが検出されている。弥生時代末から古墳時代前半には洪水による砂層が遺跡全体に広がり、その中から弥生後期土器・古式土師器などが出土している。古墳時代後期の遺構・遺物は確認されているがそれほど多くない。飛鳥時代以降になると、府道大阪東大阪線南側周辺を中心に飛鳥時代後期のものも見られるが、とくに奈良時代から鎌倉時代にかけての瓦が多量に出土し、また土器類も検出されている。これらはこの地域に存在したといわれる若江寺または若江郡衙、そして集落などに伴うものと考えられるが、現在のところ寺・郡衙の明確な場所・遺構は確認されていない。室町時代になると若江幼稚園付近を中心とした地域に城が築城された。この若江城は、河内国守護畠山氏によって14世紀後半に築造されたもので守護代遊佐氏が詰めていた。応仁の乱以降、畠山氏内の相続争いなどを含め、幾度となく戦乱の中に巻き込まれている。室町時代末期にも南河内国守護・三好義綱が城主となったが、織田信長方に攻められ滅ぼされている。その後、織田信長による石山本願寺攻めの拠点ともなったが、その和睦直後には廃絶してしまっている。そのため城の建物は壊され、主要な堀の多くも埋められてしまい、江戸時代には村となってしまった。



第1図 調査地点位置図(1/2,500)

今回の調査は平成12年4月20日付けで藤川清・スエ子氏から若江本町2丁目57-1番地において専用個人住宅の建て替えに伴う「埋蔵文化財の発掘」の届出があり、計画基礎工事に地盤改良があり掘削深度が深いことから、まず7月10日に試掘調査を実施した。その結果、土師器片などの遺物と溝状の遺構を確認した。のことから代理者を通じて協議し、発掘調査を実施することになった。発掘調査は地盤改良部分約64m<sup>2</sup>について7月17日から23日の間行った。

## 2) 遺構と遺物

遺物は第7層上面で、溝、土坑、ビット、井戸を検出し、出土遺物は土師器皿・杯身、椀、土師質羽釜・壺、須恵器杯身・壺・東播系捏鉢、瓦器椀、瓦質掘鉢・羽釜・壺、国産陶磁器、輸入磁器、製塙土器、金属製品などであった。以下、層位および主な遺構と遺物について記していく。

### 層位（第3図 図版2）

盛土。

第1層 塗灰黄色（2.5Y5/2）砂、中～細礫混じり砂質土。須恵器、土師器、瓦器、陶磁器などの小・細片出土。

第2層 灰黄褐色（10YR5/2）砂、小・細礫混じり土。須恵器、土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、陶磁器などの小・細片出土。

第3層 オリーブ灰色（5GY5/2）砂、小・細礫混じりシルト質土で、東側上層部のにはとくに粗粒砂多く含む。土師器、土師質土器、瓦器、瓦、陶磁器などの中～細片出土。近世前半の整地土。

第2・3層出土遺物（第9図 図版5）42は瓦質壺。口縁部はなだらかに外反して立ち、端部は面をなし、内面には強いヨコナデによる段を有する。外面はハケメ調整を施して。口径20.5cm。

第4層、第5層、第6層は溝2の埋土・堆積層で後述。

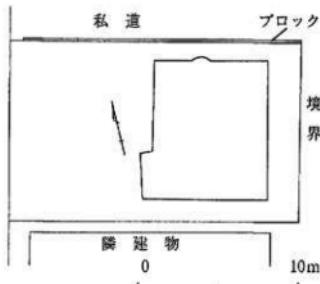
第7層 黄灰色（2.5Y5/1）中・細粒砂。遺構検出面。

第8層 にぶい黄橙色（10YR7/3）粗・中粒砂

### 井戸（第4図 図版2）

井戸は調査地北端中央付近で検出し、一部拡張したが掘方北側部分は未調査。掘方は検出の径1.15m、深さ0.68mの円筒形を呈し、その中央に底部を穿った羽釜を4段（5段目の一部）積み重ね井戸枠にしつらえていた。埋没時に上部の羽釜を打ち壊し中に入れ込んで埋めたと思われ、接合復元でさらに2段分を確認することができ、本来は6段積み重ねられていたことになる。掘方周囲および底面は黄灰色中・細粒砂（第7層）、にぶい黄橙色粗・中砂（第8層）であった。掘方内の4段の羽釜井戸枠周辺の埴土は上から灰黄褐色（10YR5/2）砂混じり土（a）、明褐色（7.5YR5/6）土混じり粗・細粒砂（b）、にぶい黄色（2.5Y6/4）粗～細粒砂（c）の3層に分かれていた。

井戸の構築は、溝水層である砂層まで掘り込んだ掘方中央に、底部を打ち欠いた羽釜を最初に3段積み、下部（2～3段目中付近まで）にc—にぶい黄色粗～細粒砂を入れ、その上3段目体上部まではほぼ平坦にb—明褐色土混じり粗～細粒砂で埋めて安定させ、さらに4段目（以上）を積み上げ、a—灰黄褐色砂混じり土で埋めたものと考えられる。

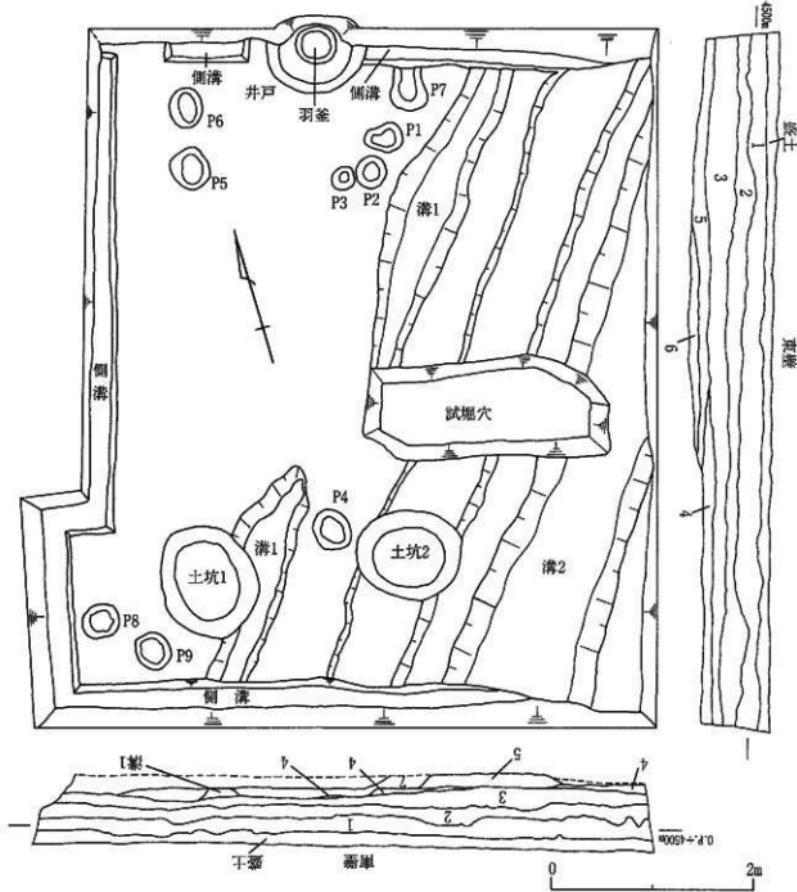


第2図 トレチ位置図

井戸内出土遺物（第5・6図 図版3）

井戸からは、井戸枠として使用された土師質羽釜のほか土師器皿、瓦器柄、瓦質土器、須恵器、鉄釘2本などが出土した。

1～6は、土師質羽釜。いずれも底部周辺欠損、外面煤付着。井戸枠の転用品。口縁部は体部から内傾して立ち、端部を肥厚させ玉縁状を呈する。体部は外弯して下りやや扁平な球形。鋤は退化氣味の断面U字形。外面は板状工具によるナデ調整が見られる。河内産。口径は、1より28.2cm、31.2cm、30.0cm、33.4cm、28.0cm、31.4cm。2は口縁端部が少し立ち、古い型式の要素がみられ、4



第3図 遺構平面図および断面図

は口縁部の立ちが低く鉢も短く、若干退化した形態をなしているといえよう。

溝2は、南西から北東方向に延びる溝で、検出の長さ8.5m、幅3.8~1.2m、深さ0.4~0.5mを測り、北西肩は3段に落ち、南東肩はトレンチ南東部で2段目の一部までを検出したのみであった。北西肩の状態から推定すると、あくまでも今回の検出面でのものであるが溝幅は約5.8mはあったと考えられる。溝内は2時期の埋土（第4・5層）と初期の堆積土（第6層）の3層に分けられる。各層から出土した主な遺物は以下のとおりである。

第4層出土遺物（第9図 図版5） 34~36・39は瓦器椀。35・39は内面見込みに平行線状暗文を施してゐる。35は口径14.4cm。34・36は内面に粗い渦巻状の暗文が施してゐるが、外面にはヘラミガキが全く見られない。口径は34が13.4cm、36が15.4cm。37・38は土師器甕。37の口縁部は体上部から「く」の字形に外反して立ち、端部は面をもつ。体部内面はヘラケズリを施してゐる。口径14.4cm。38の口縁部は体上部から「く」の字形に外反して立ち、端部を丸くおさめてる。体部内面はヘラケズリ、外面はタタキを施してゐる。口径18.8cm。

40は須恵器甕。口縁端部は面をもつ。ロクロナデ調整を施してゐる。口径19.6cm。

41は瓦質羽釜。口縁部は内傾して立ち、端部を丸くおさめてる。口縁部直下に退化気味の鉢がついでいる。内面には細かいハケメ調整を施してゐる。口径12.8cm。

43は備前擂鉢。口縁端部は上下に拡張し尖り気味におさめてる。内面には擂目(5/cm)を施してゐる。口径30.8cm。

また、南東角近くからは貨銭一大宋元寶（南宋、宝慶元年・1225年、初鋤）？一も出土した。

第5・6層出土遺物（第7図 図版4）

7~10・17は土師器小皿。口径7.6~8.0cm。7・9は体・口縁部が平底からなだらかに外反して立ち、口縁端部を丸くおさめてる。8・10は体・口縁部が外方に広がり、端部を上方に屈曲させてる。17は口縁部が平底からわずかに立ち、端部を尖らせておさめてる。

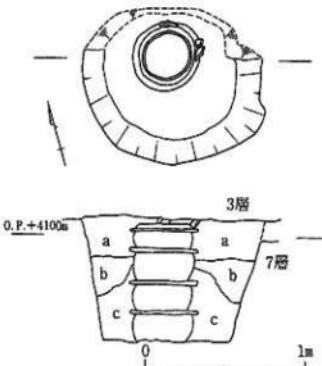
11~16・18は土師器中皿。口径8.3~10.0cm。11~13はやや上げ底の底部から体・口縁部はなだらかに外反して立ち、口縁端部を上方につまみあげておさめてる。14~16は体・口縁部が平底からなだらかに外反して立ち、口縁端部を丸くおさめてる。18は体・口縁部がやや上げ底の底部から外上方に立ち、口縁端部を丸くおさめてる。

19~23は土師器大皿。口径12.9~15.6cm。19は体・口縁部がなだらかに外上方にのび、口縁端部をやや尖らせておさめてる。内面は工具痕がある。20~23は体・口縁部が屈曲しながら外上方にのび、口縁端部をつまみあげておさめてる。

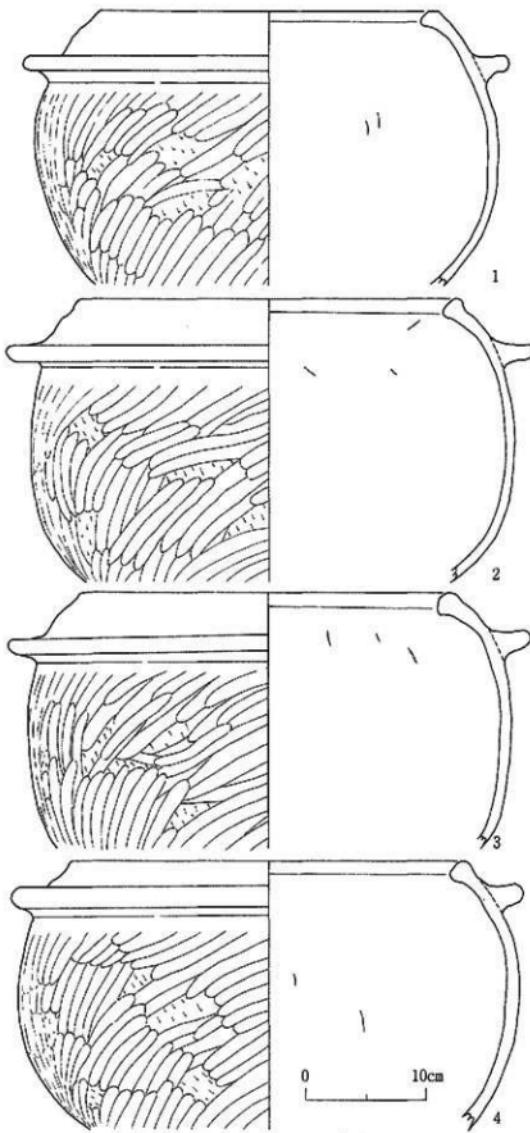
24は白磁碗の底部。外面高台上方部にハケメ、内面には蛇の目釉ハギが施されてる。底径7.8cm。

25は瀬戸美濃青磁碗の口縁部。口縁部は直線的に外上方に広がり、端部を丸くおさめてる。口径17.8cm。

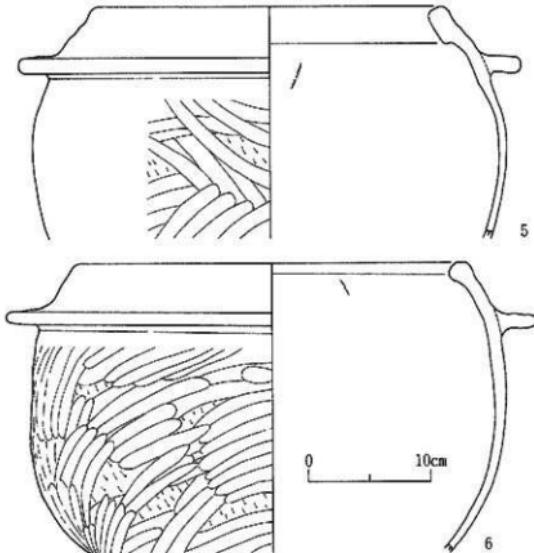
26は和泉型の瓦質擂鉢。内面に2種類のハケメ(8/cm・10/cm)が施されてる。口径23.6cm。



第4図 井戸平面図および断面図



第5図 羽釜実測図 (1)

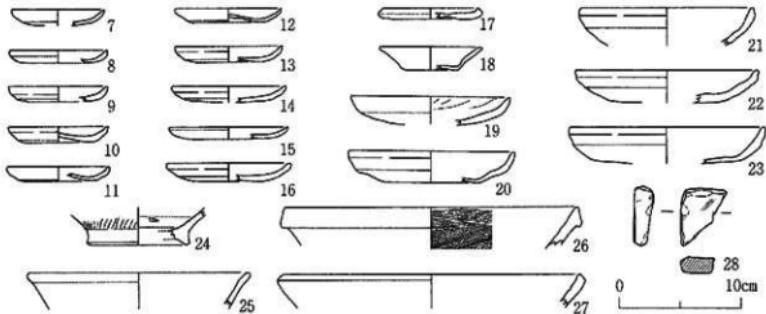


第6図 羽釜実測図(2)

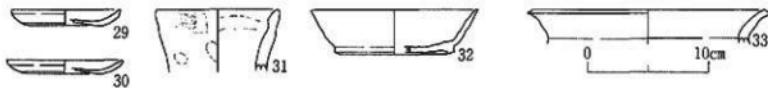
27は東播系須恵器捏鉢。口縁端部は方形を呈している。口径24.1cm。28は砥石。3面に砥面が認められる。

とくに最上層の埋土である第4層に見られるように古式土師器など古い時期の遺物も含まれているが、備前摺鉢(43)なども出土しており、この溝は14世紀前半ごろに形成され、最終的には16世紀後半になって完全に埋没したと考えられる。

溝1は、南西から北東方向に延び溝2にはほぼ平行していた。検出の長さ8.3m(途中で切られているが)、幅0.3~0.9m、深さ0.1mを測る。溝内は灰色(5Y4/1)細礫混じり土で、土師器、瓦器、瓦



第7図 溝2内出土遺物実測図



第8図 土坑2・ピット5内出土遺物実測図

質土器、須恵器の小・細片が少量出土した。

土坑1は、 $1.4 \times 1.2\text{m}$ 、深さ0.15mを測る楕円の浅鉢状を呈し、溝1を切り込んでいる。土坑内は灰色(7.5Y5/1)細繰混じりシルトで、土師器、瓦器、瓦質土器、須恵器の細片が出土した。

土坑2は、 $1.3 \times 1.1\text{m}$ 、深さ0.12mを測る楕円の浅鉢状を呈し、溝2を切り込んでいる。土坑内は灰オリーブ色(5Y5/2)細繰混じりシルトで土師器片をはじめ瓦器、須恵器の小・細片が出土した。

#### 土坑2出土遺物(第8図)

29・30は土師器中皿。口縁部はやや上げ底の底部から外方に広がり、端部を上方につまみ上げておさめてる。口径は29が $8.4\text{cm}$ 、30が $9.4\text{cm}$ 。

その他ピットを9個検出した。それぞれの埴土内から土器は出土したが、遺物の観察についてはその中で計測できた遺物のみ記す。

ピット1  $0.42 \times 0.3\text{m}$ のややいびつな楕円形を呈し、深さ0.1mを測る。埋土は灰色(5Y5/1)シルトと灰色(5Y4/1)土が混じり、土師器、瓦器、瓦質土器の小・細片が出土した。

ピット2 径 $0.4\text{m}$ の円形を呈し、深さ $0.08\text{m}$ を測り、埋土は暗灰黄色(2.5Y5/2)細繰混じり土で、土師器、瓦器、瓦質土器の小・細片が出土した。

ピット3 径 $0.28\text{m}$ の円形を呈し、深さ $0.06\text{m}$ を測り、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)砂混じり土と灰色(10Y5/1)シルトの混土。

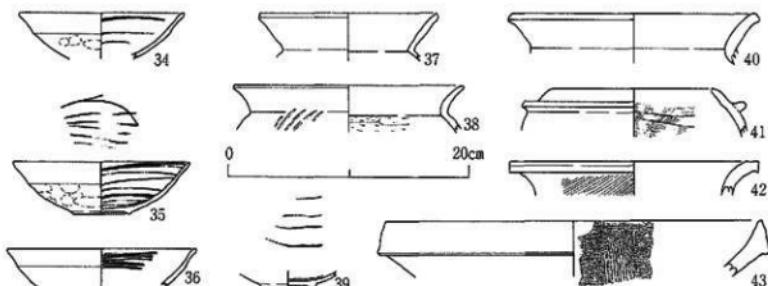
ピット4  $0.5 \times 0.4\text{m}$ の楕円形を呈し、深さ $0.07\text{m}$ を測り、埋土は灰色(5Y4/1)細繰混じり土。

ピット5  $0.52 \times 0.45\text{m}$ の楕円形を呈し、深さ $0.12\text{m}$ を測り、埋土は灰色(10Y5/1)細繰混じり粘土質土で、土師器、須恵器、製塙土器などの中～細片出土。

#### ピット5内出土遺物(第8図 図版5)

31は製塙土器。口体部が直線的に外方にのび、口縁端部を尖り気味におさめてる。ユビオサエと細かいハケメ調整を施してる。口径 $10.0\text{cm}$ 。

32は須恵器杯身。内外面底部に一定方向のナデを施している以外は、すべてロクロナデ調整。口径 $13.4\text{cm}$ 、器高 $3.7\text{cm}$ 、高台径 $9.0\text{cm}$ 。



第9図 遺物包含層内出土遺物



第10図 主な小字図

今回の調査では、鎌倉時代後半から江戸時代初頭にかけての遺構と、古墳時代前期の古式土師器・奈良時代の須恵器・製塩土器・鎌倉～江戸時代初頭にかけての土器類(瓦器・土師器・陶磁器)などの遺物を検出した。

とくに鎌倉時代後半から室町時代前半にかけての遺構(井戸・溝など)・遺物(土師器皿・瓦器碗など)が多く、その中でも注目されるのは、14世紀前半に形成され16世紀後半まで活用されていたと思われる溝<sup>2</sup>である。この溝の埋没時期が本遺跡の中心的存在である若江城の廃絶時期とほぼ同じであること、若江地域には城関連の小字が多く残存し当該地東側を含む地域が「城の川」という小字にあたっていること(第10図参照)から、この溝が若江城に関係したものであることが窺がえる。すなわち、城築造以前の集落に伴って穿たれていた溝を城の形成過程でその一部に取り入れられたものと考えられよう。

このように若江城の北部地域にあたる当該地において、若江城の築城前、城の存続とその廃絶以降の状況の一端を知ることができた。しかし、この周辺での発掘調査は若江遺跡の中でも数少ない地域であり、今後の調査の進展によってこれらのことさらにならん確認されることを期待したい。

33は土師器甕。口縁部は体上部から「く」の字形に外反し、端部を外方に肥厚させて面をなしてゐる。口径19.0cm。

ピット6 0.48×0.38mの楕円形を呈し、深さ0.07mを測り、埋土は灰色(5Y4/1)土。

ピット7 0.42×0.51(以上)mのややいびつな楕円形を呈し、深さ0.08mを測り、埋土は灰オリーブ色(7.5Y5/3)土と灰色(10Y6/1)土の混土で、土師器、瓦器の小・細片が出土した。

ピット8 径0.42mの円形を呈し、深さ0.13mを測り、埋土は灰オリーブ色(7.5Y5/2)細粒砂混じりシルトで、青磁片が出土した。

ピット9 0.48×0.4mの楕円形を呈し、深さ0.06mを測り、埋土は灰色(10Y4/1)細礫混じり土で、土師器、瓦器の小・細片が出土した。

### 3)まとめ

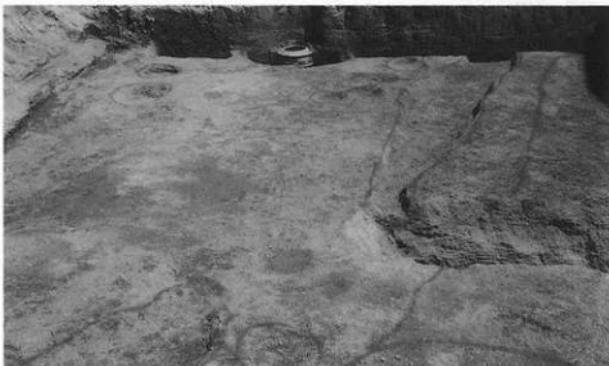
図版1 若江遺跡第77次調査 遺構



遺構北側（西より）



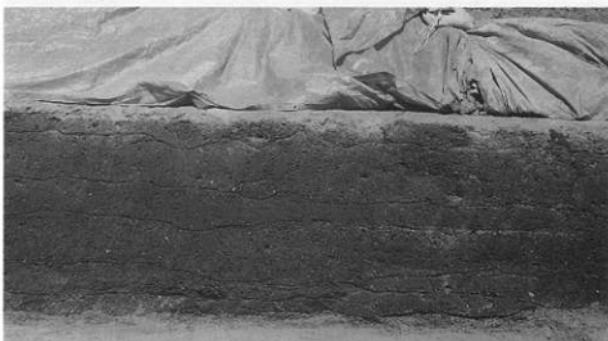
遺構南側（西より）



遺構（南より）



井戸（南より）

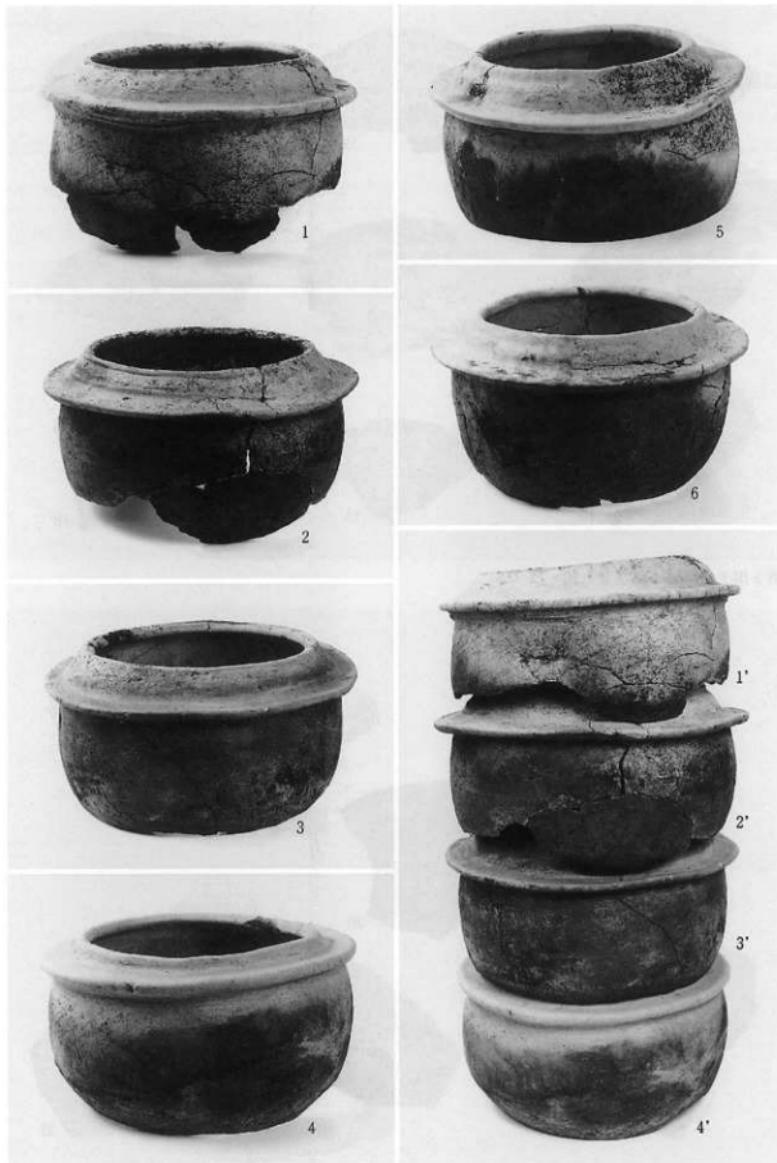


東断面（部分）



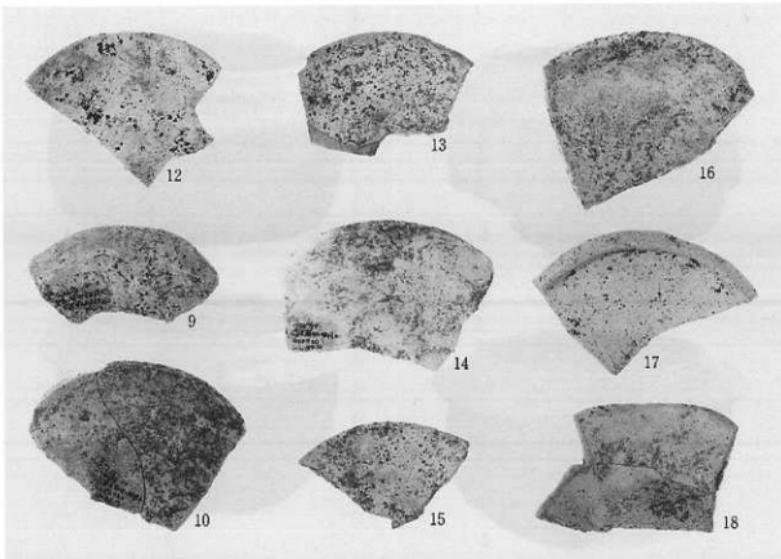
西断面（部分）

圖版3  
若江遺跡第77次調査  
遺物

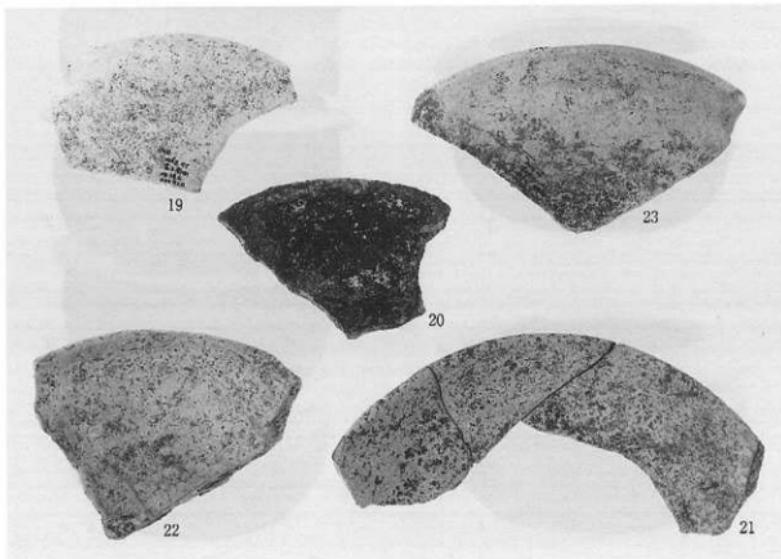


井戸1出土土師器羽釜（1～4）、井戸1内出土土師器羽釜（5・6）

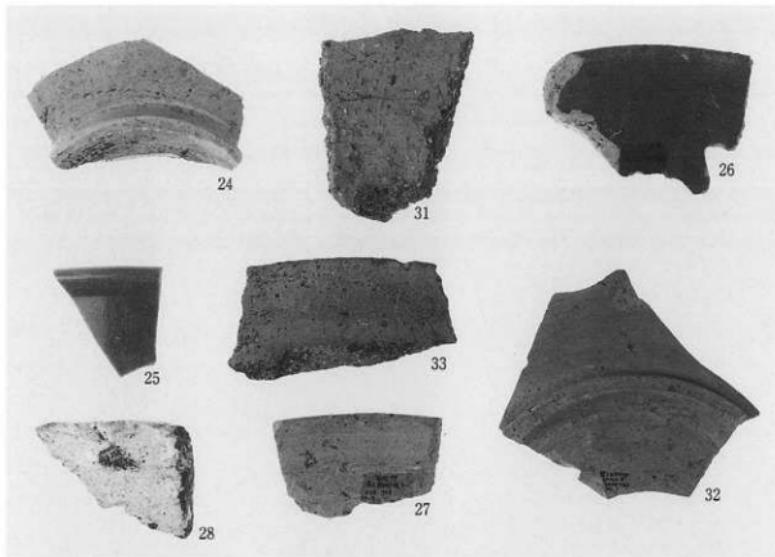
圖版4  
若江遺跡第77次調查  
遺物



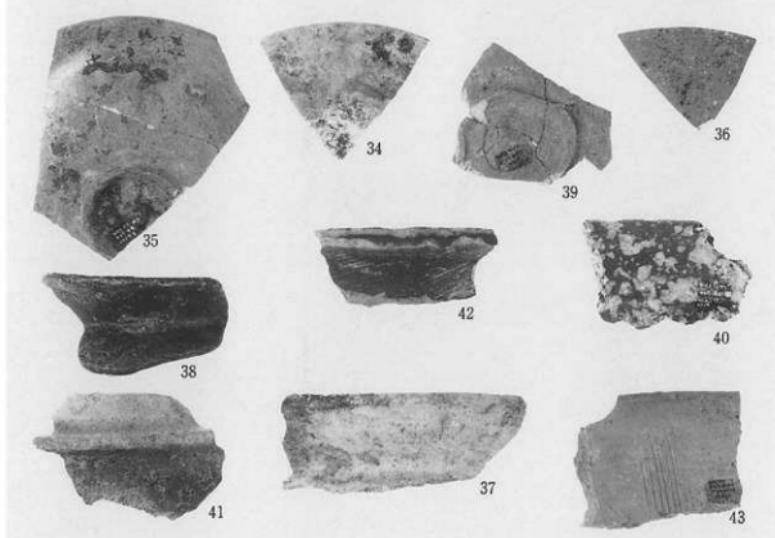
溝2出土土師器小皿（9・10・12~18）



溝2出土土師器大皿（19~23）



溝2出土白磁碗（24）青磁碗（25）瓦質擂鉢（26）東播系須惠器捏鉢（27）石製品砥石（28）.Pit 5  
出土製鹽土器（31）須惠器杯身B（32）土師器壺（33）



第4層出土瓦器椀（34~36・39）土師器壺（37・38）瓦器（40）瓦質羽釜（41）備前燒擂鉢（43）  
第2・3層・東側溝出土瓦質甕（42）



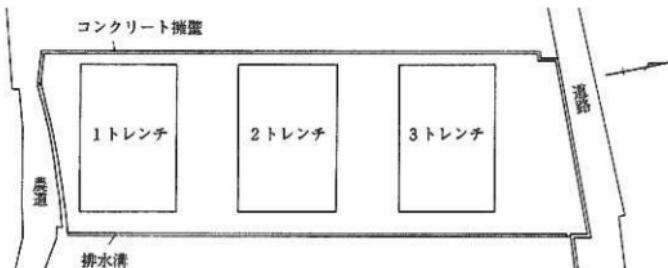
## 第6章 山畠古墳群第19次発掘調査

### 1) はじめに

山畠古墳群は、瓢箪山町、上四条町、客坊町に広がる6世紀から7世紀初頭にかけての群集墳で、その中に弥生時代後期の山畠遺跡を内在している。古墳はこれまで68基が確認されているが、後世、とくに近代以降の開墾などによりその多くが破壊・欠損し、現存するのは約30基のみである。古墳の多くは径10~15mの円墳であるが、中には瓢箪山古墳などにみられる双円墳や方墳、上円下方墳などの墳形もみられる。主体部の多くは横穴式石室で、墳丘上に小竪穴式石室、羽釜棺などを伴うものも若干知られている。蓋形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪や円筒埴輪が出土しているものもあるが、極めて少ない。石室内に組合式石棺も納めているものもみられるが、多くは複数の木棺が納められていたようである。遺物は多くの須恵器・土師器などの土器類のほか、大刀、鉄鎌、刀子などの鉄製品、石製の玉類や耳環などの装身具類が出土している。とくに杏葉、轡などの馬具類の出土割合が多いことに注目されている。郷土博物館の西にあたる周辺は、弥生時代後期の竪穴住居や多くの弥生土器と石器などが検出されている山畠遺跡で、高地性集落と考えられている。山畠古墳群の北には群集墳を含む客坊山遺跡群がある。古墳は21基みつかっており、遺跡西部の棚田部分には平安時代から鎌倉時代にわたる客坊庭寺があり、同地域は室町時代には客坊城であったことが確認されている。

平成12年10月24日付けで柳井正雄氏から、客坊町968-2において賃貸の共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財の発掘」の届出があった。当該地は昨年実施した第18次調査地に南接することから、11月1日に試掘調査を実施した。試掘調査は建物予定地内3箇所で行ない、土師器、須恵器などの遺物とピットなどの遺構を確認した。その結果に基づき代理者を通じて協議を行ない、埋蔵文化財に影響を与える基礎工事部分3ヶ所の計159.7m<sup>2</sup>を対象として11月13日から12月8日の間発掘調査を実施した。調査地区は南から1、2、3トレントとした(第2図)。





第2図 トレンチ位置図

## 2) 基本層位

第1層 緑灰色（10GY5/1）砂混じり粘質土。若干細礫含む。耕土。

第2層 にぶい赤褐色（5YR5/4）砂礫混じりシルト質土。やや粘質。土師器、須恵器、瓦器の小・細片出土。

第3層 灰黄褐色（10YR5/2）砂、大～細礫混じりシルト質土。弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦など多量出土。近世後半以降の棚田形成に伴う土層。

第3'層 橙色（10YR4/4）砂礫混じりシルト質土。2トレンチ。

第3''層 オリーブ灰色（2.5GY5/1）砂、中～細礫混じり砂質土。3トレンチ。

第3下層 オリーブ灰色（5GY6/1）シルト質細粒砂。土師器、瓦器、須恵器の小～細片出土。3トレンチ。

第4層 灰色（5Y4/1）砂礫混じり粘土。ややシルト質。土師器、須恵器の細片出土。

第5層 黒褐色（7.5YR3/2）砂礫混じりシルト質粘土。地山。各遺構検出面。

## 3) 遺構と遺物

各トレンチでは第5層上面において、溝、土坑、落ち込み、ピットなどの遺構を検出し、第2～4層にわたる各遺物包含層からは、土師器皿・杯身・壺・甕、土師質羽釜、瓦器椀・小皿、瓦質羽釜・擂鉢・火舍、須恵器皿・杯身・東播系捏鉢・壺、国產陶磁器、輸入磁器、瓦などが出土した。以下、トレンチごとに分けて主要な遺構と遺物について記す。

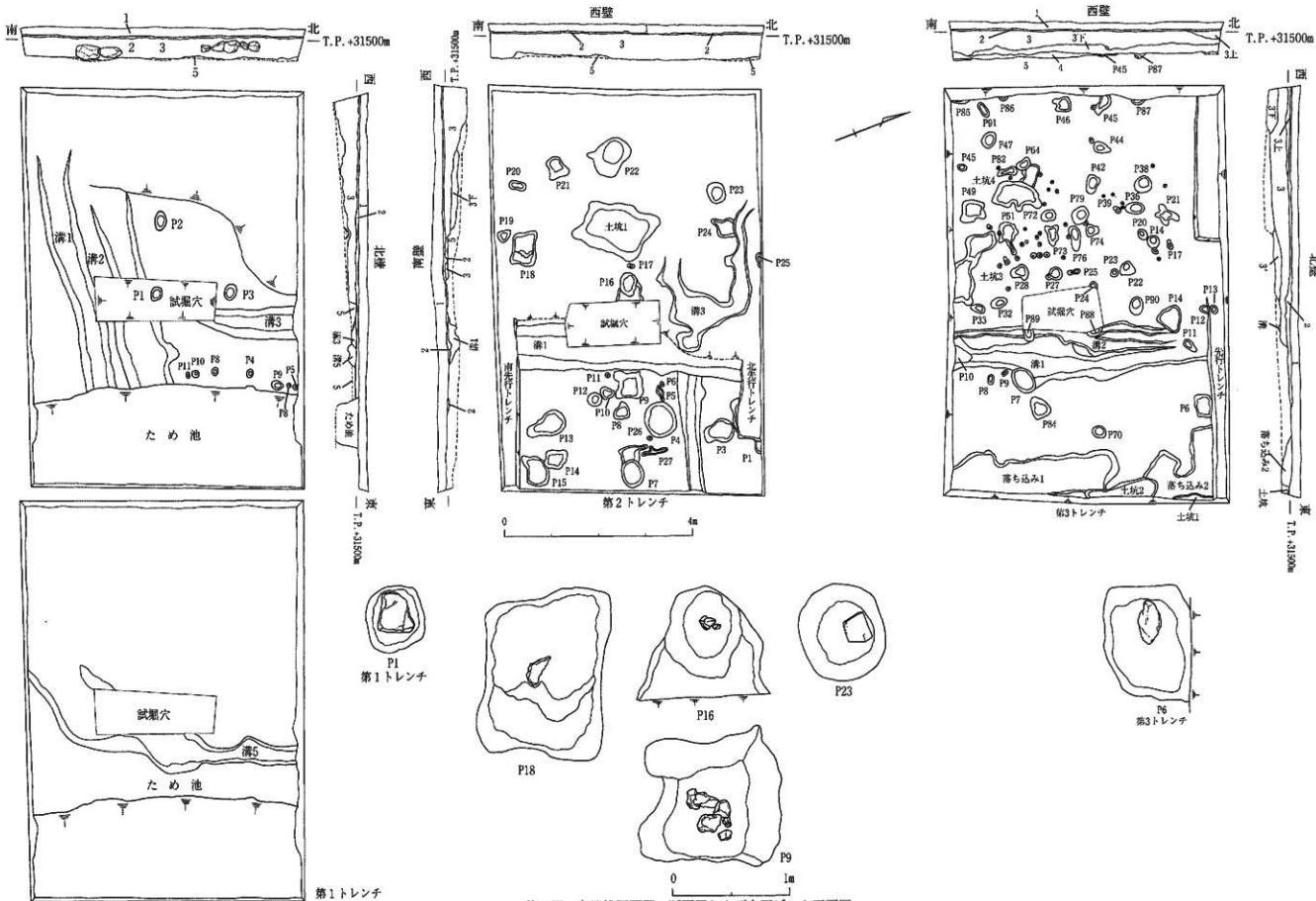
### 1トレンチ（第3図 図版1・2）

1トレンチでは第1層を取り除くと、第2層上面においてトレンチ東部で検出の東西幅2.2m（南北はトレンチ幅）、深さ0.7m以上の落ち込みを確認した。落ち込み内の埋土は浅黄色（5Y8/4）・明緑灰色（10G7/1）砂混じり粘質土。現代のため池。

第2層のにぶい赤褐色砂礫混じりシルト質土は、厚さ4～10cmを測りほぼ平坦で、土師器、瓦器、須恵器の小・細片が出土した。

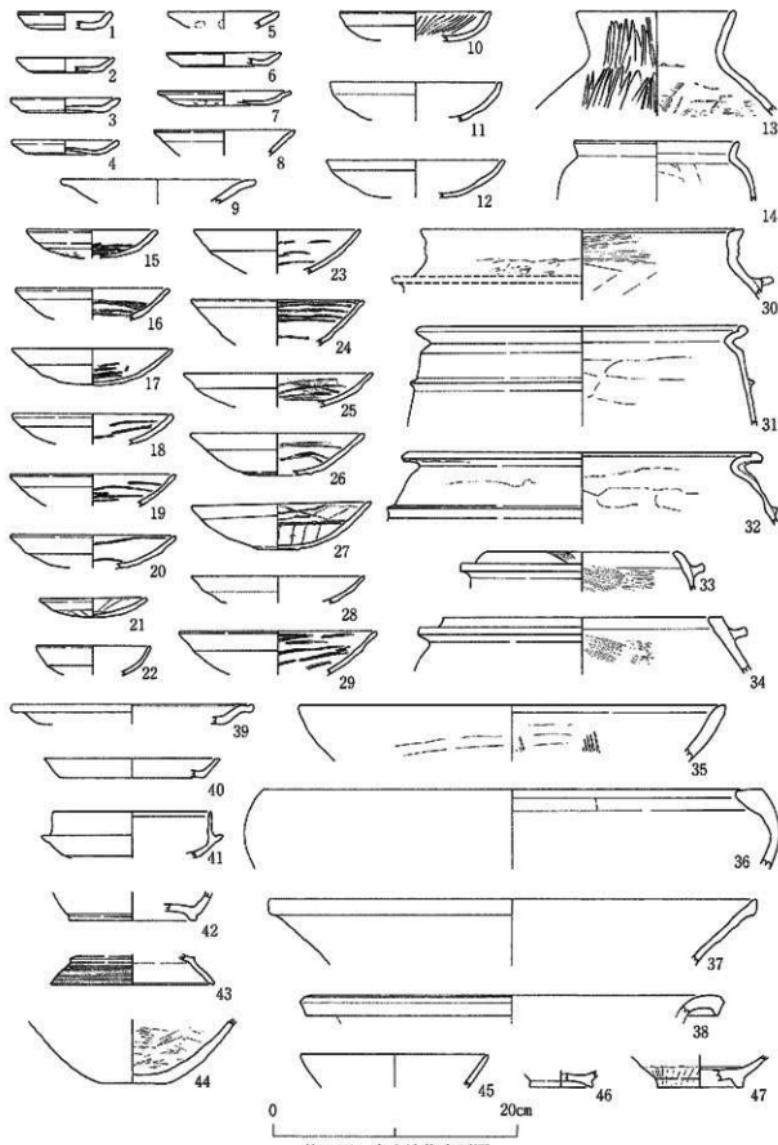
第3層の灰黄褐色砂礫混じりシルト質土は、西側に傾斜している第5層などを掘り上げて形成した棚田の整地層と思われ、東部にはなく中ほどに段を有し、厚さは中部で0.1～0.15m、西部で0.5～0.6mを測る。西端部には棚田に伴う石垣（石塊）の一部が見られた。弥生後期土器、須恵器杯・甕、土師器壺・皿、瓦器椀・瓦質羽釜・火舍、陶磁器、瓦などの遺物を多く包含していた。

### 第2・3層出土遺物（第4図 図版6・7）



第3図 各造構平面図・断面図および主要ピット平面図

- 21は瓦器小皿。体口縁部は外上方に浅く立ち、端部を丸くおさめてる。
- 34は三足付き瓦質羽釜。口縁部は外弯する体部から内傾して立ち、端部は面をもっておさめ、口縁部直下に短い鉢が付いている。内面には細かいハケメ調整を施してる。口径22.8cm。
- 41は須恵器杯身。口縁部はほぼ水平な受け部から直線的に立ち、端部はやや丸くおさめ内面にヨコナデによる退化した段がみられる。口径13.0cm。
- 第3層出土遺物（第4図 図版5～7）
- 5は土師器中皿。口縁部は外上方にはほぼ直線的に広がり、端部を丸くおさめてる。口径9.2cm。
- 7～9は土師器大皿。7は口縁部が中央部上げ底気味の底部からやや屈曲して外上方に広がる。底部外面にはヘラケズリが施されている。口径11.0cm。8・9は口縁部が直線的に外上方に広がり、端部を丸くおさめてる。口径は8が11.6cm、9が16.0cm。
- 14は土師器甕。丸味を帯びる体部から口縁部は屈曲して外上方に広がり、端部を丸くおさめてる。体部内面に工具によるナデ調整が施されている。口径13.6cm。
- 18は瓦器椀。内面に粗い渦巻き状の暗文が施されている。
- 31・32は羽釜。口縁部は内傾しながら立って外折し、端部を短く内側に折り返して。鉢は退化気味。口径は31が27.2cm、32が29.6cm。
- 33は三足付き瓦質羽釜。口縁部は内傾して短く立ち、端部をやや尖らせておさめ、口縁部直下には短い鉢がついてる。内面には細かいハケメ調整が施されている。口径15.6cm。
- 36は瓦質火舍。内弯して立つ口縁部から、端部は内側に張り出し面をなして。口径40.8cm。
- 38は須恵器甕。大きく外弯する口縁部から、端部は下方に拡張して面をなして。口径34.8cm。
- 39・40は須恵器皿。39は口縁部が外方に広がる体部から屈曲し、端部は面をなして。口径19.8cm。
- 40は口体部が外上方にはほぼ直線的にのび、端部はそのままおわる。口径14.4cm。
- 45は瀬戸美濃焼の白磁碗。口体部は直線的に外上方に広がり、端部を丸くおさめてる。内外面に粗い貫入がみられる。口径15.4cm。46は綠釉陶器椀。高台の内側に段を有し、内面見込みには1条の沈線が施されている。底径5.2cm。
- 第5層上面において2時期の溝4条とピットを11検出した。
- 第1遺構
- 溝1は、東南東から西北西にのび、検出の長さ6.2m、幅0.7～0.9m、深さ0.12mを測る。溝内は大半は灰色（10Y6/1）シルト混じり細粒砂でにぶい黄橙色（10YR5/4）砂粒含む。上層の一部にぶい赤褐色（5YR5/4）砂混じりシルト質粘土。溝2は、溝1とはほぼ平行してのび、検出の長さ5.1m、幅0.8～1.45m、深さ0.18mを測る。溝内は3層に分かれ、下層はオリーブ灰色（5GY6/1）シルト混じり細粒砂で、植物遺体を含み最下部はややシルト混じり粘土。中層は灰色（7.5Y6/1）小礫混じり中～細粒砂。上層は灰褐色（7.5Y5/1）砂混じりシルト質土。土師器皿、瓦器椀細片と陶器小片出土。
- P1は、すでに試掘調査時に確認していたもので、0.24×0.26m、深さ0.1mを測り、その中に厚さ4～6cmの平面台形状の石が据えられていた。P2・3はP1とともに埋土が灰色（7.5Y6/1）・褐色（10YR4/4）の砂混じりシルト質土。1つの建物の柱穴で、P1を角とした東西・南北1間（1.6m）分づつであると考えられる。
- P4～11は、径0.06m前後のものと、0.15m前後のものがあり、前者は杭穴と考えられる。
- 溝3は、南北方向に伸び、幅0.7～0.4m、深さ0.03mを測り、この溝は第2遺構として検出した溝5の西への増幅と考えられ、溝5は南側では西に折れていた。



第4図 出土遺物実測図

この溝は2トレンチの溝1、3トレンチの溝1・2と一連のもので、活用時には北から南、そして西に流れていたと思われる。溝内からは土師器皿、土師質土器、瓦器碗、瓦質土器、青磁、白磁などの小・細片が出土した。近世前半。

#### 2トレンチ（第3図 図版2・3）

第5層上面において3条の溝、土坑1基とピットを25検出した。西側は棚田形成に伴う削平・盛土がみられ、弥生後期土器、須恵器、土師器皿、土師質羽釜、瓦器碗、瓦質擂鉢・羽釜、東播系捏鉢、瓦、陶磁器などが出土した。

#### 第2・3層の主な出土遺物（第4図 図版6）

35は瓦質擂鉢。大和型、内面にはスリメ（5/cm）が施されている。口径35.0cm。

#### 第3層の主な出土遺物（第4図 図版5～7）

1は土師器小皿。口縁部は平底の底部から外上方に広がり、端部を丸くおさめてる。口径7.8cm。

3・6は土師器中皿。3は口縁部が平底気味の底部から外上方に広がっている。口径9.0cm。6は口縁部が上げ底気味の底部から外上方に広がっている。口径9.4cm。

15・16・19は瓦器碗。内面に粗い渦巻き状の暗文を施している。口径10.8～15.6cm。

37・44は東播系須恵器捏鉢。37は直線的に外上方に広がる口体部から口縁端部は上下に引き出し面をなしてて、口縁端面に自然釉がみられる。口径40.0cm。44は体部が小さく平らな底部から丸味をもちながら外上方に広がっている。内面は工具による乱方向のナデ調整、底部外面にハケメ調整が施されている。底径6.4cm。

溝1は南北方向にのび、北側の西肩付近は棚田形成時に削り取られていた。幅1m、深さ0.3mを測る。断面逆台形状を呈し、底面西より隆起線が見られ、東側に掘り広げたと考えられる。埋土は黄灰色（2.5Y4/1）粘土質シルトを含むオリーブ灰色（2.5GY6/1）砂、小・細礫混じりシルト質土で、土師器皿、土師質土器、瓦器碗・小皿、瓦質土器、白磁などの小・細片が出土した。

#### 溝1の主な出土遺物（第4図 図版6・7）

22は瓦器小皿。体口縁部は内弯しながら立ち、端部を丸くおさめてる。

47は瀬戸美濃焼の白磁碗。断面方形の削り出し高台を有す。内面には輪トチ痕、外面にはハケメが見られる。

溝2は東西方向にのび、幅0.3～0.6m、深さ0.1mを測る。溝3は二股に分かれ東西方向にのび、棚田形成時の削平などで浅く西側は途切れていたが、溝2と一連のものと考えられる。土師器皿、土師質土器、瓦器碗などの細片が出土した。

土坑1は1.5×1m、深さ0.13mの長方形を呈し、埋土は黄灰色（2.5Y4/1）砂混じりシルト質粘土で土師器細片が出土した。

ピットは、杭穴と思われる。径0.1m前後の円で埋土が暗緑灰色（5G4/1）砂混じりシルト質土の小ピット（P6・11・17・26）、径0.2m前後の円・不整円、椭円（P8・10・12・19・20）、一辺0.35m以上の方形・長方形（P9・18）やその他径0.3m以上の円・不整円・椭円のものがあった。P9・16・18・23には根石と思われる石が内在していた（第2図 図版2・3）。ピット内から土器小・細片が出土したものもあり、土師器とともにP4・21は黒色土器を含み、P3・7・8・9・16・23などの瓦器を伴うもの、またP15からは15世紀後半の土師器皿が出土した。明確な建物状況は不明。

#### 3トレンチ（第3図 図版3・4）

第5層上面において溝2条、落ち込み2基、土坑4基とピット89を検出した。西側は棚田形成に伴う削平・搅乱と盛土がみられ、弥生後期土器、須恵器杯・壺、土師器杯・碗・壺・皿、土師質羽釜、

瓦器碗、瓦質土器、陶器などが出土した。

#### 第3層の主な出土遺物（第4図 図版5）

2は土師器小皿。口体部は平底気味の底部から外上方に広がって。口径8.0cm。

4は土師器中皿。口体部は上げ底気味の底部から外上方に広がって。口径9.0cm。

10は土師器杯身。内面に放射状暗文を施して。口径12.4cm。

11・12は土師器碗。丸味をもつて体部から、口縁部は外上方に広がり、端部を丸くおさめて。口径は11が14.0cm、12が14.6cm。

17・20・23・25・28・29は瓦器碗。内面に粗い渦巻き状の暗文を施して。口径10.8～15.6cm。

42は須恵器杯身。「ハ」の字形に広がる断面方形の高台をもつ。高台径10.4cm。

43は脚台。脚部底邊に段を有して脚部は「ハ」の字形に広がり、端部内側に段をもつ。外面にはカキメ調整を施して。

#### 第3下層の主な出土遺物（第4図 図版5・6）

13は土師器甕。口縁部はなだらかに「く」の字形に外反して立ち、端部を丸くおさめて。内面はハケメ調整（6/cm）、外面はヘラミガキ調整を施して。口径13.2cm。

24・26・27は瓦器碗。24・26は内面に粗い渦巻き状暗文を施して。26は断面三角形の低い貼り付け高台を有し、口径14.3cm、器高3.4cm、底径7.2cm。27は断面三角形の低い貼り付け高台を有し、内面見込みに平行線状の暗文を施して。口径14.7cm、器高4.0cm、底径3.2cm。

土坑1・2および落ち込み1・2は現代。

溝1北側・溝2北・西側大半は第3層によってほとんど削平されていた。溝1は幅0.9～0.35m、深さ0.07mを測り、埋土は黄灰色（2.5Y4/1）粘土質シルトを含むオリーブ灰色（2.5GY6/1）砂、小・細繊混じりシルト質土で、土師器皿、瓦器碗の細片が出土した。溝2は幅0.4～0.12m、深さ0.05mを測り、中央付近で二股に分かれている。埋土はオリーブ灰色（2.5GY6/1）で、土師器皿、瓦器碗、土師質土器、須恵器の小・細片が出土した。

ピットは、溝1・2によって切られていたり、その底部などから検出し、いずれもこれに先行するものと考えられる。径0.09～0.05mの小ピットが多くみられ、杭穴と思われる。P6・7・49のように大きめのものもみられ、P6からは根石を検出したが（第2図 図版4）、多くは径0.2m前後の円、不整円、梢円のものであった。ピット内からは土器の小・細片が出土したものがあり、土師器とともにP35・49・73は黒色土器を含み、P6・20・22・27・36などのように瓦器を伴うもの、またP33のように15世紀後半の土師器皿の出土したものもあった。明確な建物状況は不明。

#### 4)まとめ

調査地西側全域に近世後半以降の棚田形成のための大がかりな整地に伴う客土—第3層—がみられていた。この層内には弥生後期土器、古墳時代の須恵器、土師器、奈良時代の須恵器、土師器、瓦、平安時代から鎌倉時代の土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、室町から江戸時代の土師器、土師質土器、国産陶磁器など多量の遺物を包含しており、とくに弥生後期土器は東南部の山畠遺跡、奈良時代の瓦は河内寺跡のものと思われ、広い範囲から土が持ち込まれてきたことをうかがわせている。今回検出した遺構・遺物は、とくに平安時代中期から室町時代中葉にわたるもののが数多くみられた。のことから当該地は山畠古墳群内に位置してはいるが、東北部に広がる客坊遺跡群内の客坊廃寺および客坊城との関連が深いと考えられる。今後、前年度に実施した第18次の調査結果および客坊遺跡群での調査や文献資料などを踏まえ、十分検討を加えてきたと考えている。

図版1 山畠古墳群第19次調査  
遺構



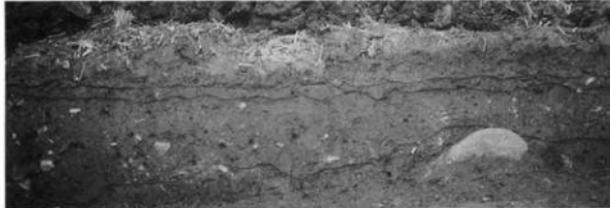
1 トレンチ第1遺構（東より）



1 トレンチ第2遺構（東より）



1 トレンチ北断面（部分－東側）



1 トレンチ北断面（部分一西側）



2 トレンチ遺構（東より）



2 トレンチP 9根石検出状況

図版3 山烟古墳群第19次調査  
遺構



2 トレンチP23根石検出状況



2 トレンチ北断面（部分）



3 トレンチ遺構（東より）



3 トレンチP 6 根石検出状況

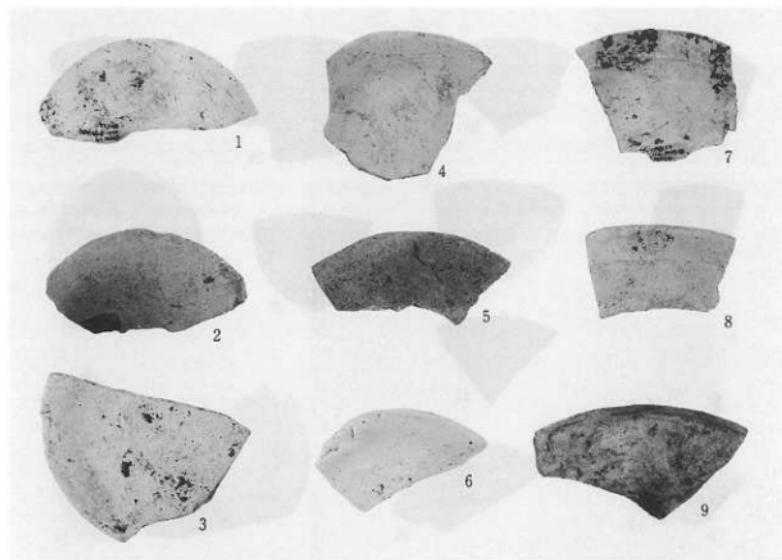


3 トレンチ北断面（部分）

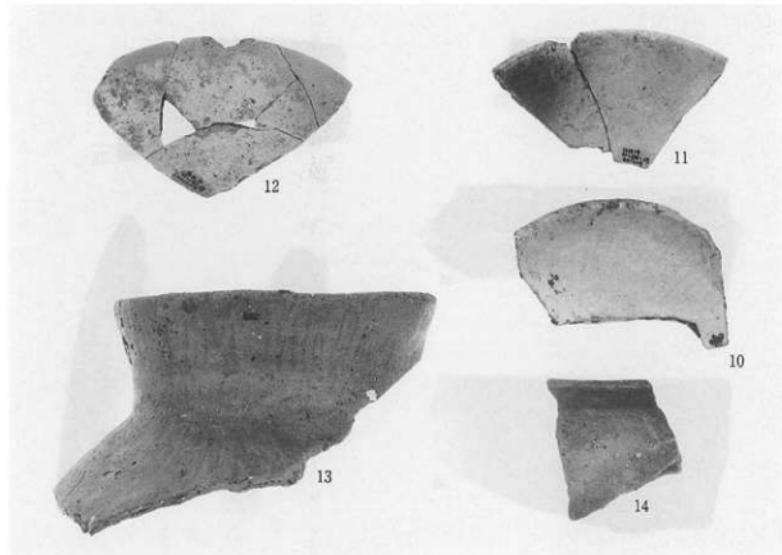


3 トレンチ南断面（部分）

圖版5 山畠古墳群第19次調査  
遺物



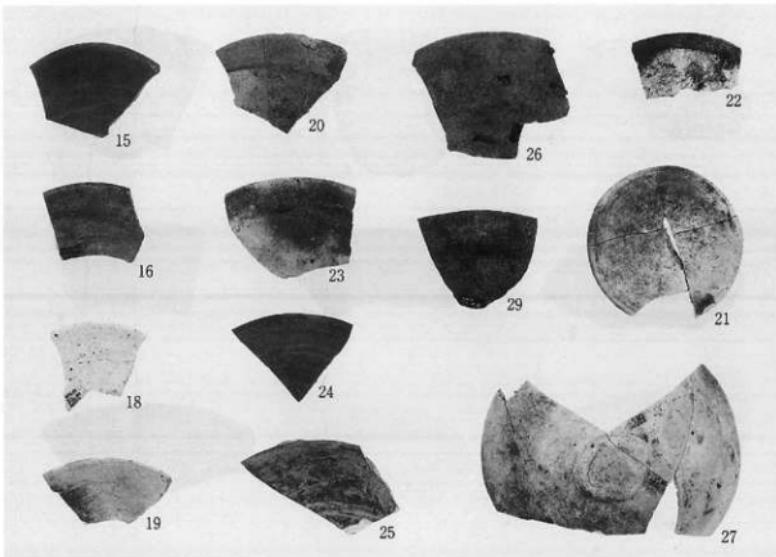
土師器皿



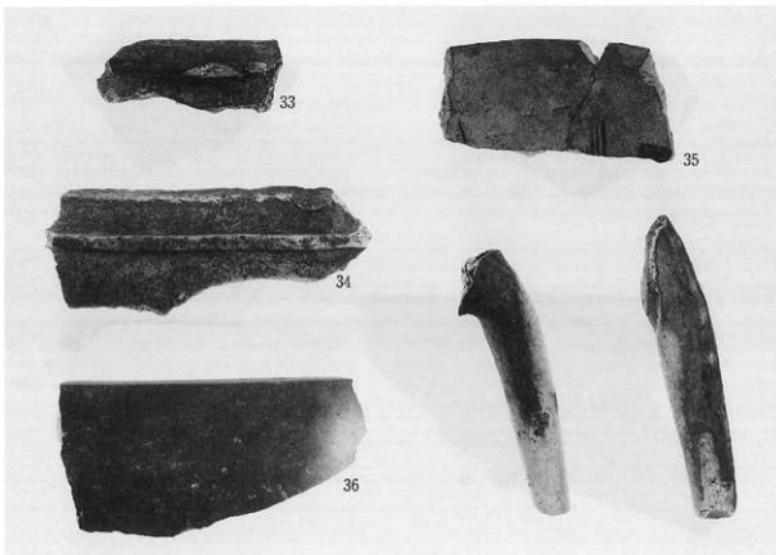
土師器

圖版 6

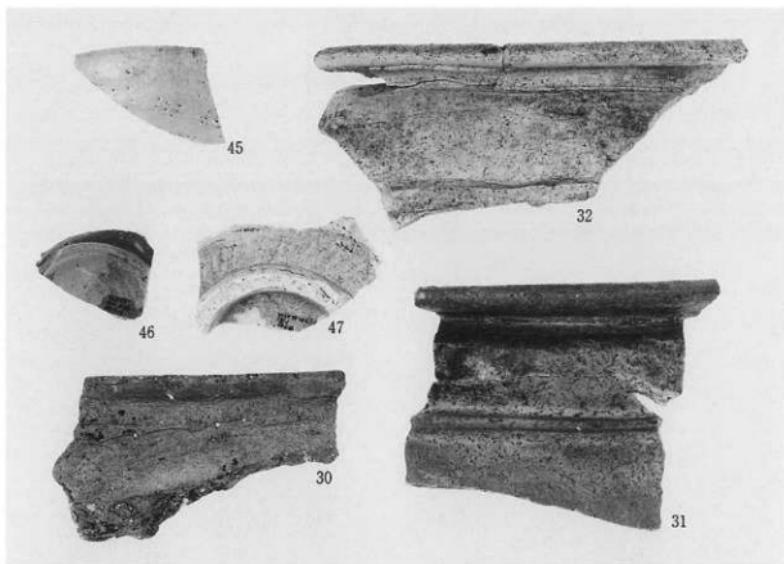
山烟古墳群第19次調査  
遺物



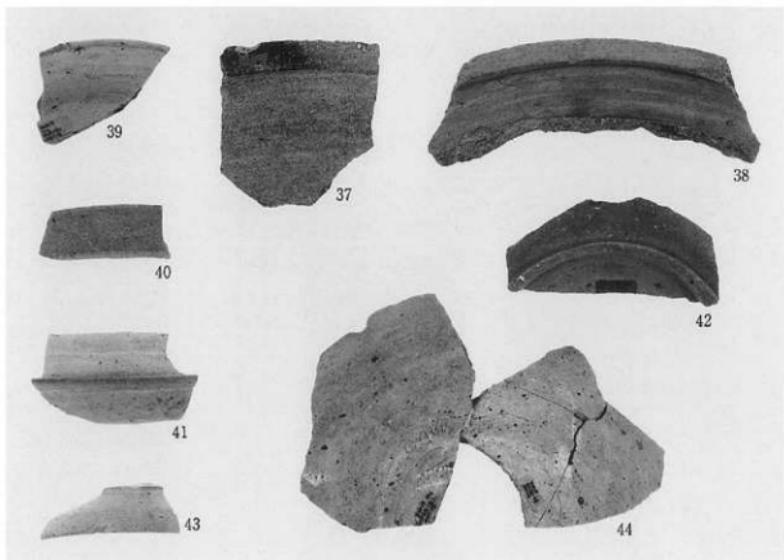
瓦器



瓦器



陶磁器、土師器羽釜



須恵器



## 第7章 段上遺跡II次発掘調査

### 1) はじめに

段上遺跡は末広町、六万寺町3丁目、下六万寺町3丁目一帯に広がる縄文時代から平安時代に亘る複合遺跡で、標高10~15mの東から西にかけての緩やかな斜面地にある。これは生駒産地西麓にみられる谷から流出する河川によって形成された扇状地のひとつで、その端部にあたるためである。発掘調査は今年度まで12次を数えている。下水道・ガス工事に伴う調査などでその一端を窺う資料を提供してくれていたが、とくに府道大阪東大阪線の道路改良事業に伴う調査（続行中）は広範囲な調査であり、その成果から本遺跡の性格を明確に知ることができる。

本遺跡は縄文時代中期から弥生時代前半にかけてほぼ中央を東から西にむかっての谷筋があり、その中から縄文・後期土器などが出土している。弥生時代中期には甕棺墓や土器・石器など、後期には柱穴などの遺構と土器などの遺物が多く検出されている。古墳時代になると中期後半から後期前半にかけての小形低丘墳が営まれ、後世の削平によって埋葬施設は不明であるが、それぞれの周溝内から円筒埴輪、朝顔形埴輪、韓式系土器、須恵器、土師器、動物遺体（馬の歯）などが出土した。また後世の整地土の中からは家形埴輪も検出されている。奈良時代には大がかりな整地が行われ、その層内からは弥生土器、古墳時代の須恵器、土師器などとともに奈良時代の須恵器、土師器を包含しており、平安時代前半の大溝やピットなどが確認されている。

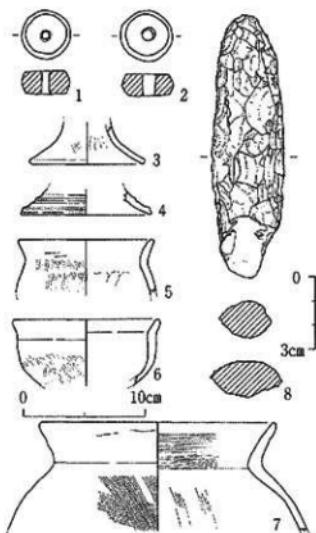
平成12年6月5日付けで今里安宏氏より、下六万寺町3丁目1328-8において個人専用住宅建設に伴う「埋蔵文化財の発掘」の届出があった。建設予定地は南北方向に走る旧国道170号線（旧東高野街道）の西に位置し、道路の西は傾斜がきつく高低差があり、道路面を設計G.L.とすることから建物基礎工事については埋蔵文化財に支障をきたさないと思われたが、浄化槽部が深く、代理者と協議しこの部分約6.3m<sup>2</sup>を対象として調査を行うことになり、6月29日に調査を実施した。

### 2) 層位と出土遺物

調査範囲内では明確な遺構を検出することは出来なかつたが、遺物包含層と遺物を確認することが



第1図 調査地点位置図(1/2500)



第2図 出土遺物実測図

できた。出土遺物は弥生土器壺・甕、土師器高杯・鉢・羽釜、須恵器高杯・甕・杯、製塙土器、土製品、石製品などで、以下、層位と主な遺物について若干記しておく。

#### 層位(図版1)

盛土

第1層 青灰色砂混じりシルト質土、旧耕土。

第2層 オリーブ灰色中・細粒砂

第3層 灰色・灰黄褐色・にぶい黃橙色砂混じりシルト質土、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、製塙土器などの遺物出土。

1・2は土製錘鉢。ともに中央に円孔を有する上面が平らなドーナツ形を呈する。ほぼ完形。厚み2cm。

1は在地産で、35.87gをはかる。

3は土師器高杯。外面ハケメ、内面にシボリメが見られる。口径9.1cm。

4は須恵器高杯。裾部端面に凹線文、裾部に2条の凸帯を施している。口径10.6cm。

5・6は小形鉢。ともに口縁部は体部からなだらかに外反して立ち、端部を丸くおさめている。外面にはハケメ調整を施している。口径は5が11.0cm、6が11.8cm。ともに在地産。

7は土師器甕。口縁部は丸く内傾して体上部から「く」の字形に外反し、端部を丸くおさめている。内外面ともにハケメ調整を施している。口径19.0cm。在地産。

第4層 灰色砂混じりシルト質土、弥生土器、石製品出土。

8は打製石製品の石槍。基部は使用による折れのため欠損。身部の側・端部は両面からの細部調整によって刃状に成形し、中央断面はレンズ状を呈している。最大の幅2.9cm、厚み1.5cm、残存の長さ10.85cm、重さ61.23g。サスカイト製。

#### 3)まとめ

今回の調査は、調査範囲が極めて狭く、浄化槽埋設の掘削深度一第4層途中一までしか確認することはできなかった。そのため遺構は全く確認することはできなかったが、第3・4層から上記の遺物を検出した。

第3層は弥生土器や古墳時代の遺物を含んでいたが、奈良時代の須恵器片を含んでおり、この時期の整地層と思われる。また、第4層は弥生時代の層で石槍のほか、中期の壺・甕とともに後期の甕片を確認し、この時期の包含層であると考えられる。

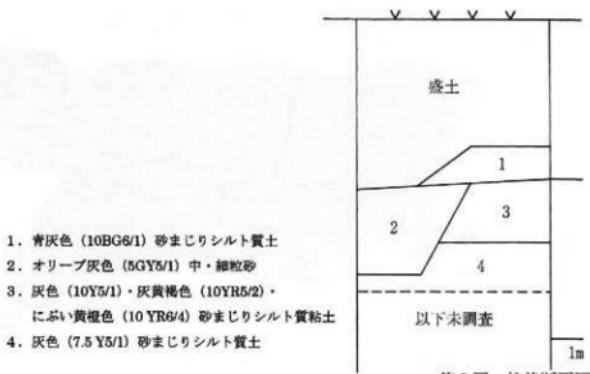
調査地周辺の詳細については、平成12年11月から実施している当該地南側に新設される府道大阪東大阪線道路改良事業に伴う第12次発掘調査の結果とその報告をまって後日に期したいと思う。



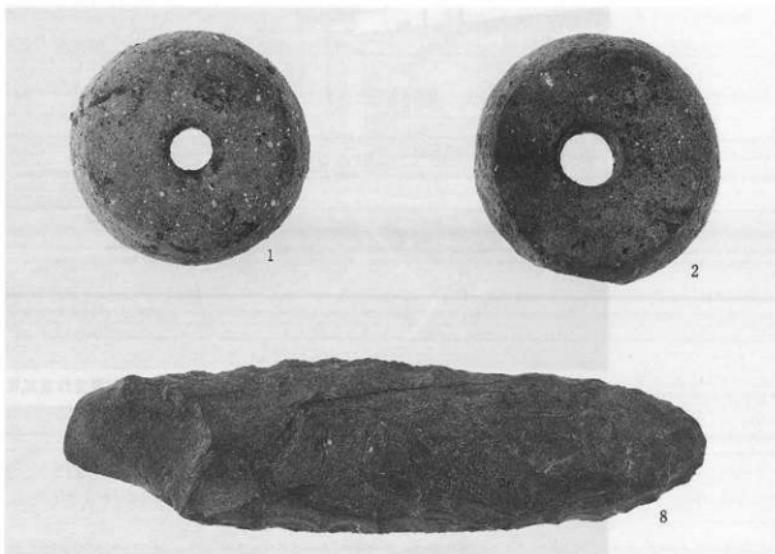
試掘調査作業風景



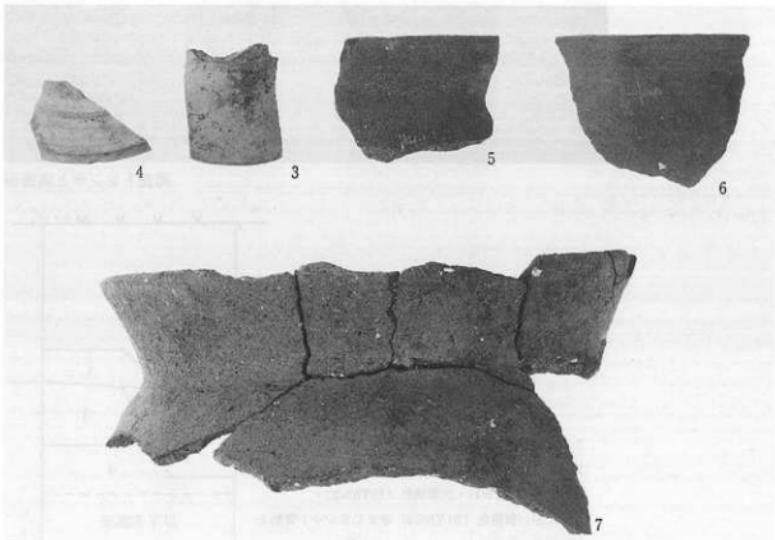
調査トレンチと南断面



第3図 柱状断面図



土製品紡錘車 (1・2) 石製品石槍 (8)



土師器高杯 (3) 小型鉢 (5・6) 壺 (7) 須恵器高杯 (4)

報告書抄録（その1）

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう -へいせいじゅうにねんど-
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報 -平成12年度-
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	第1章 勝田邦夫 第2・3章 下村晴文 第4~7章 若松博恵・楳原美智子
所在地	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4番23号
発行年月日	平成13年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所 在 地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
やまはたこふんぐん 山畑古墳群	東大阪市客坊町	27227		12年1月 11~15日	34m <sup>2</sup>	賃貸共同 住宅建設
こわかえいせき 小若江遺跡	東大阪市小若江 3丁目	27227		12年 1月31日~ 2月1日	12m <sup>2</sup>	個人専用 住宅建設
こうなみいせき 神並遺跡	東大阪市西石切町 1丁目	27227		12年 4月28日~ 5月26日	161m <sup>2</sup>	賃貸共同 住宅建設
わかえいせき 若江遺跡	東大阪市若江本町 2丁目	27227		12年7月 21~23日	42m <sup>2</sup>	個人専用 住宅建設
やまはたこふんぐん 山畑古墳群	東大阪市客坊町	27227		12年 11月13日~ 12月8日	159.7m <sup>2</sup>	賃貸共同 住宅建設
だんのうえいせき 段上遺跡	東大阪市下六万寺町	27227		12年 6月29日	6.3m <sup>2</sup>	個人専用 住宅建設

報告書抄録（その2）

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山畑古墳群 (第18次調査)	古墳 集落 遺物散布地	弥生時代 古墳時代 歴史時代	建物跡・土坑 石垣	弥生土器・土師器・瓦器・輸入磁器	
小若江遺跡 (第5次調査)	集落	古墳時代 歴史時代	溝・ピット・ 土坑	土師器・瓦器・錢貨(永楽通宝)	
神並遺跡 (第25次調査)	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代 歴史時代	溝・ピット・ 土坑	土師器・須恵器・ 黒色土器・輸入磁器・瓦・製塙土器	
神並遺跡 (第27次調査)	集落	弥生時代 古墳時代 奈良時代 歴史時代	溝・ピット・ 土坑・落ち込み	弥生土器・土師器・ 須恵器・黒色土器・ 縁軸陶器・輸入磁器・瓦・石器	
若江遺跡 (第77次調査)	集落 城跡 寺院跡	弥生時代 古墳時代 奈良時代 歴史時代	井戸・溝・ ピット・土坑	土師器・須恵器・瓦器・ 国産陶磁器・輸入磁器・瓦・製塙土器・ 金属製品	
山畑古墳群 (第19次調査)	古墳 集落 遺物散布地	弥生時代 古墳時代 歴史時代	溝・ピット・ 土坑・落ち込み	土師器・須恵器・ 瓦器・国産陶磁器・ 輸入磁器・瓦	
段上遺跡 (第11次調査)	集落 古墳	弥生時代 古墳時代 歴史時代	無	弥生土器・土師器・ 須恵器・製塙土器・ 土製品・石器	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

一平成12年度一

発行日 平成13年3月31日

編集・発行 東大阪市教育委員会

〒577-0843 東大阪市荒川3丁目4番23号

TEL(06)6728-9361